古代史を解明する会

第37回

「文献と考古資料の対応：天孫降臨・日向三代」

2024年1月13日

丸地三郎

前回・日向三代の論議に続く。

- 前回、日向三代の地理・内容を、古事記・日本書紀の記述と注記をベースに報告した。
- 報告を受けた方々から意見が出され、議論が行われた。
- 文献だけでは、多様な解釈があり、年代・地理なども大きく分かれ、集約されることは無かった。
- 中國の史書に、倭国からの朝献の事実と年代が記載されていることが提示され、関連性の検討が提唱された。
- 考古資料との対応も提起されていた。

- 今回は、
  - 天孫降臨・日向三代の神話に該当する考古資料・中国史書の探し出し、対応を試みる。
  - 方法論は下記に沿うものとする。
    - ✓ 天孫降臨・日向三代の文献に存在する事象を整理し直す。
      - ✓ 考古資料に対応する項目を洗い出し、整理する。
      - ✓ 中國史書の事象に対応する事象を整理する。
    - ✓ 考古資料・中国史書に対応させ、整理した文献の事象を記述する。
      - ✓ 推定年代を入れて年表を作成する。

日向三代:記紀の記述

- 日向三代の神話
  - ✓ **天孫降臨**で、
    - 天児屋命など主要な人物を付け、三種の神器などを持ち、武装した人を伴う。
    - 筑紫の日向の国に降り、吾田の長屋の笠狭碕に立つ
    - 猿田毘古神と天宇受売命の挿話

前段

- 邇邇藝命と木花之佐久夜毘売の結婚(石長比売の挿話)
  - 笠狭の御前で、木花之佐久夜毘売(神阿多都比売)と会う
  - 醜い姉(石長比売)を追い返し、長寿では無くなる、
  - 火の産屋の出産 (海幸彦/山幸彦の誕生)
- 海幸彦/山幸彦の兄弟争い
  - 海・山の狩猟用の得物の交換 : 山幸彦が釣り針を紛失
  - 弟・火遠理命 : 海神の宮訪問・海神の娘=豊玉姫と結婚
  - 潮満珠・潮乾珠/海幸彦=火照命の服従、
- 鵜葺草葺不合命の誕生
  - 豊玉姫:生む時の鰐の姿を見られ海へ帰る
  - 海神の妹=玉依姫が乳母として来る
  - 鵜葺草葺不合命が玉依姫と結婚

後段

- ✓ 五瀬・稲飯命・三毛野命・神倭伊波毘古命(神武天皇)の誕生
  - **神武東征へ**

天孫降臨と日向三代の登場人物

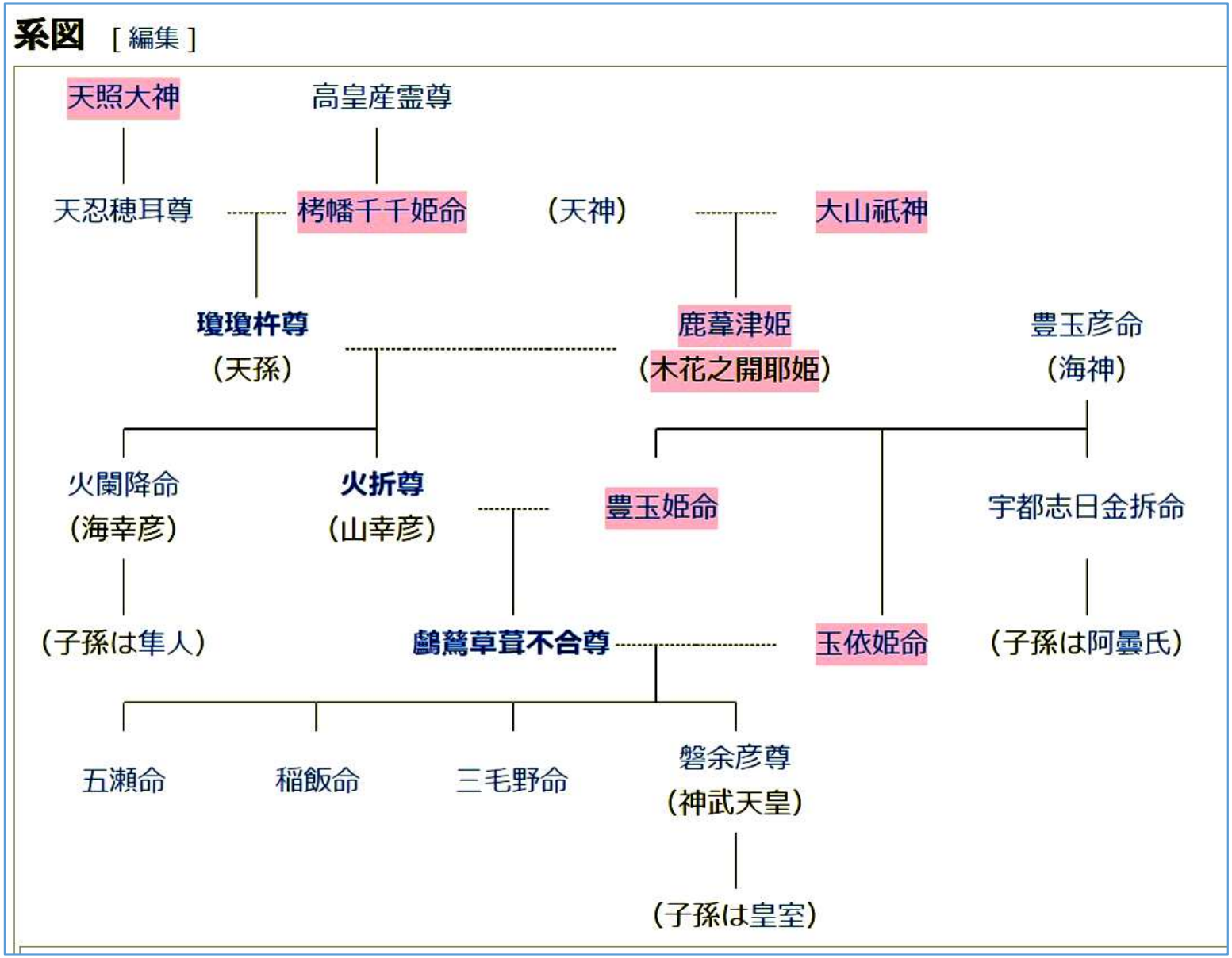
- 高天原の主：天照大神
  天の岩戸事件で須佐之男命を追放
- 高天原を引き継いだ天忍穂耳命

----日向三代-----

- 高天原から降臨した邇邇芸命
  （ニニギノミコト）
- 火遠理命
  （ホオリノミコト）
- 鵜草葺不合命
  （ウガヤフキアエズノミコト）

- 神武東征に参加した
  五瀬命
  稲飯命
  三毛入野命
  伊波礼毘古命（神武天皇）

右図は Wikipedia より



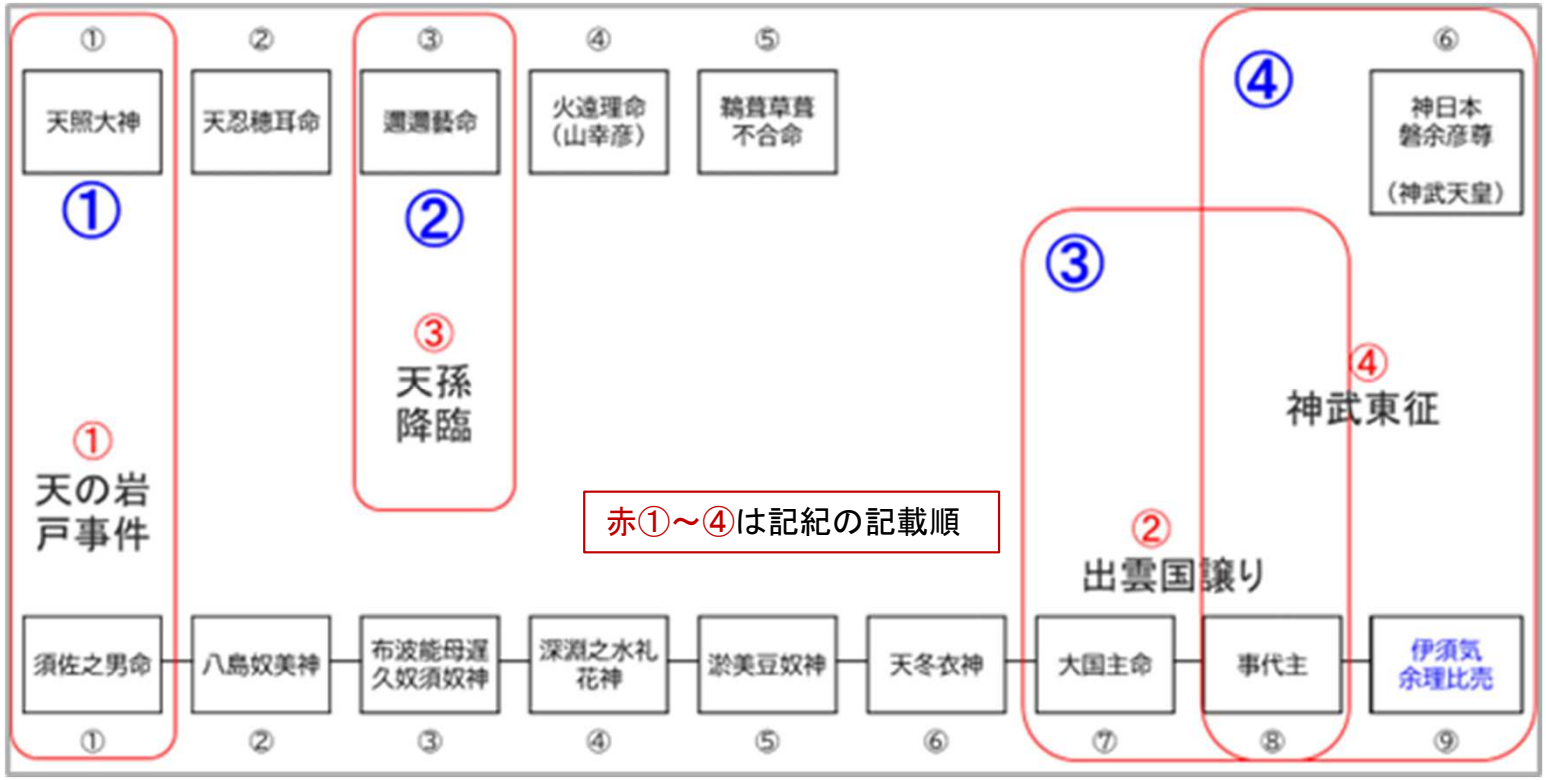
日向三代の地理・天孫降臨と天の岩戸の論議

- 日向三代の舞台：所在地を検討した。 木花之佐久夜毘売(コノハナサクヤヒメ)の出会いの地を検討
  - 天孫降臨の到着地は、「吾田の長屋の笠狭碕」で、そこで、神阿多都比売＝木花之佐久夜毘売に出会った。
  - 吾田：阿多の名称から鹿児島：薩摩の阿多の地が日向三代の活躍地との意見が出された。
    - しかし、異論があった。
- 天孫降臨について検討した。
  - 岩波の日本書紀の注記に「天の岩戸の説話の次に、この天孫降臨の話が続いていたもの」との指摘がある。
  - 天孫降臨に同行したメンバー8人が「天の岩戸」の主要な登場人物であることから、二つの事件の発生時期が近いと判明。（大方の意見が一致）
    - 天孫降臨した邇邇藝命が、三種の神器を携えたことと主要メンバーが同行したことから、一つの国家が移動したことを示すとの解釈が出された。
- 年代（時期）：天孫降臨・日向三代
  - 年代を短く考える人達は、AD200年～300年の凡そ100年の出来事と考える。
  - 年代を長く考える人達は、紀元元年前後～300年程の出来事と想定。

- 文献からの理解では、地域：地理的にも、年代的にも理解に大きなギャップが生まれ、解消できなかった。 そこで中国史書や考古学資料との対比検討が望まれた。

天孫降臨・日向三代の歴史的解釈

- 岩波書店の「日本書紀」の注に記載された「天の岩戸の説話の次に、この天孫降臨の話が続いていたもの」との指摘により、古事記・日本書紀の記述の解釈は大きく変わる。
  - 具体的に考えられる状況に至る。



- そこで、天の岩戸・天孫降臨・日向三代の解釈を試みる。

邇邇藝命の降臨の解釈と問題点

- 邇邇藝命の降臨
    - 邇邇藝命への王位継承を行い、政治を行う主要メンバーを同行し、鏡作・玉作・鍛冶の主宰者を連れ、 軍事を司る二名の将軍が警護する大移動と読める。（三種の神器/真床追衾） 一つの國の王と構成員が大移動した大移動であったと推定する。
  - 本拠地・高天原に何が起きていたのか？
  - 本拠地・高天原はどうなったのか？
    - 何も無い時に、このような王城を棄て、王族・軍隊・主要メンバー・工業生産者が別の地に移動することは有り得ない。
- ほぼ同じメンバーが体験した事件が前に有った。
  - 須佐之男命が乱暴を行い、王の天照大神が天の岩戸に逃げ込み、このメンバーが助け出し、須佐之男命を追放した事件。
  - 同じメンバーの名前が上っていることから、天の岩戸事件から降臨の間隔は、それほど長くない。
    - 須佐之男命の一族が再び、高天原を攻めてきて、敗退の危機に瀕していたと考えるのが自然。
    - 天孫族が退避・移住する外に、何か手を打つことは無かったのか？
      - 火明命＝饒速日命の情報が消え、神武東征時に大和に出現することは、何か関係するのか？
    - 政権運営の主要メンバーと精鋭の軍隊を失った天忍穂耳命は、そのまま、王として存在できたとは思えない。
  - 出雲族に敗れ、王城は占領され、主要産業は出雲族の所有に変わった筈。
- 降臨した邇邇芸命達は、
  - 新天地は、護り易く、十分な広さがあり、食料生産が可能な土地が望ましい。
  - 戦乱を勝ち抜くために、武器製造・工業生産が求められた筈。
    - 原材料の輸出入のためにも、海に面し港の存在が必須。
  - 食糧確保（農業・漁業）、鉄製品・勾玉・鏡などの工業製品を再興したと日向三代の記述から伺える。

邇邇藝命・降臨の解釈と問題点 ②

- 天の岩戸事件と天孫降臨の間が、20～30年程度の短い時間であるとする。
  - 岩戸事件に関わった主要メンバーがそのまま天孫降臨したことは、上記の短期間を意味する。
  - 須佐之男命一族は、追放され出雲で拠点を作り勢力の復活に成功し、九州にも勢力を伸ばしたものと推定。記紀にその記述は無いが。
- 天孫一族は、次世代の天忍穂耳命が継ぎ、北九州全域で繁栄したものと推測。
  - その後、出雲族が北九州の旧勢力地に復活し、天孫一族と衝突する状態となり、出雲族が優勢となると推測。
  - その時の様子を、日本書紀では、「然も彼の地に、多に蛍火の光く神、及び蠅声す邪しき神有り。」と記述。さらに、「吾、葦原中國の邪しき鬼を撥ひ平けしめむと欲ふ。」と、使者として天穂日命を出雲にでした。と記述する。
    - うるさい（五月蠅い）ほどの悪い神が居る。人々の住む葦原中國の邪悪な鬼を払うために使者を出すほどであった。
- 更に、天孫一族にとって状況が悪くなったものと推測。 天忍穂耳命は、王位を邇邇芸命に譲り、三種の神器を渡し、主要閣僚と軍隊を付けて、再興を託して、邇邇芸命を退避させたのが、天孫降臨と考えられる。

  - 古事記では邇邇芸命の兄である天火明命の動静の記載は無くなるが、神武東征時に、大和に居て、名前を饒速日命と変え、神武と敵対することが記される。
    - 日本書紀本文では、天火明命は邇邇芸命の子とされ、1世代異なる。
  - 天火明命は、旧事本紀などに記載があり、検討してみる。

天の岩戸事件の解釈と問題点

- 天の岩戸事件の経緯と解釈
  - 須佐之男命が高天原に来ることが判ると、天照大神は、武装して待ち構える。 →戦争を示す
  - 須佐之男命の弁明があり、「うけい（誓約）」が行われ、3姉妹/5兄弟が生まれる。 →講和
  - 須佐之男命が高天原に入り、乱暴・狼藉を行う。 →戦争再開
  - 天照大神は岩戸に隠れた。 →須佐之男命勝利/天照大神敗北
  - 八百万の神々が天の安河の川原に集まり →天孫側の援軍到来
  - 天の岩戸の開放を画策し、成功 →援軍側の勝利
  - 須佐之男命を捉え、罰を与え、追放 →須佐之男命敗北・追放

- 天照大神と須佐之男命の戦い
  - 天照大神（天孫族・天津族）と須佐之男命（出雲族）は、異民族の戦いでは無く、同じ倭人の勢力争いと理解できる。（天照大神と須佐之男命を兄弟として記述していることから推定。）
  - 天孫族は、天照大神まで、天之御中主から12代続く。
    - 高天原は、実際には、北九州に存在したと理解する。
    - 天孫一族の特長は、三種の神器（剣・勾玉・鏡）
  - 須佐之男命は、同族であるが、天孫一族とは別系統の一族で同じく北九州に存在した。

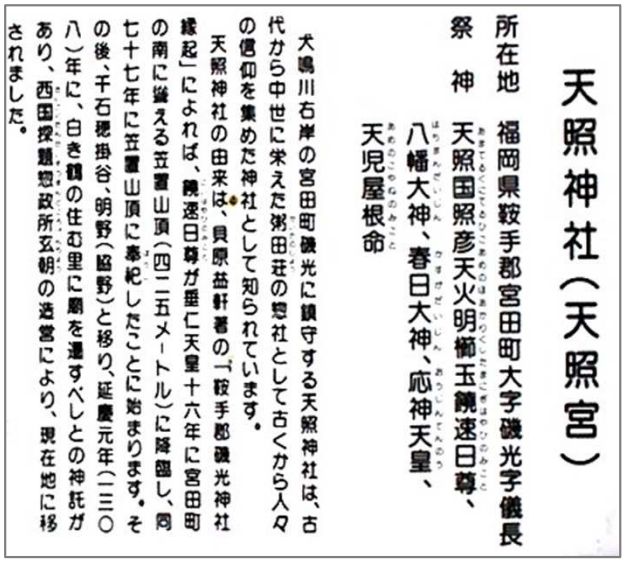
✓ 12代と長く続く天孫族の高天原政権に、別の一族の須佐之男命が反旗を掲げ、高天原を攻めた戦いで、一時講和し、小康状態を経たが、須佐之男命が武力で高天原を蹂躙し、勝利した。しかし、天孫一族の援軍が現れ、須佐之男命軍を撃退し、王である天照大神を救出し、須佐之男命を捕虜とし、 九州から追放した事件と理解する。

天火明命：饒速日の消息

- 古事記では、天火明命は邇邇芸命の兄で、ここでは古事記の記述による。
  - 日本書紀の本文、一書（第3）では、邇邇芸命の子で、海幸彦・山幸彦の兄弟となっている。
  - 日本書紀の一書（第6）（第8）は古事記に同じ。
    - 神武東征の時、大和を護る饒速日命が登場。

- 北九州東部の遠賀川流域には、天火明命（饒速日尊）の伝承がある。
  - 鞍手郡の笠置山頂に饒速日尊が降臨。 →神社看板（可児資料より）
- 飯塚市の立岩遺跡では、遠賀川流域では珍しく、甕棺墓群が出土。
  - 前環境10面出土

- 海部氏の系図では、天火明命＝饒速日尊と記される。
  - 饒速日は、天火明命の子と云う説もある。



天照神社（天照宮）

所在地　福岡県鞍手郡宮田町大字磯光字儀長

祭　神　天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊、
八幡大神、春日大神、応神天皇、
天児屋根命

犬鳴川右岸の宮田町磯光に鎮守する天照神社は、古代から中世に栄えた粥田荘の総社として古くから人々の信仰を集めた神社として知られています。

天照神社の由来は、貝原益軒著の「鞍手郡磯光神社縁起」によれば、饒速日尊が垂仁天皇十六年に宮田町の南に聳える笠置山頂（四二五メートル）に降臨し、同七十七年に笠置山頂に奉祀したことに始まります。その後、千石堀掛谷、明野（昭野）と移り、延慶元年（一三〇八）年に、白き鶴の住む里に廟を遷すべしとの神託があり、西国授題惣政所玄朝の造営により、現在地に移されました。

- 日本書紀に饒速日が天磐船で大和に降臨したとの記述がある。
  - 旧事本紀に物部に一族である五部人と二十五部人を伴として来たとの記述があり。
  - 鳥越憲三郎氏は、物部一族は北九州・遠賀川流域から渡来したことを割り出した。

- 天忍穂耳命の息子兄弟：
  - 兄は、遠賀川の流域に移動し、本人か、子孫が、地域の部族を引き連れ大和に降臨した。
  - 弟は、筑紫の日向の地に天孫降臨したことになる。

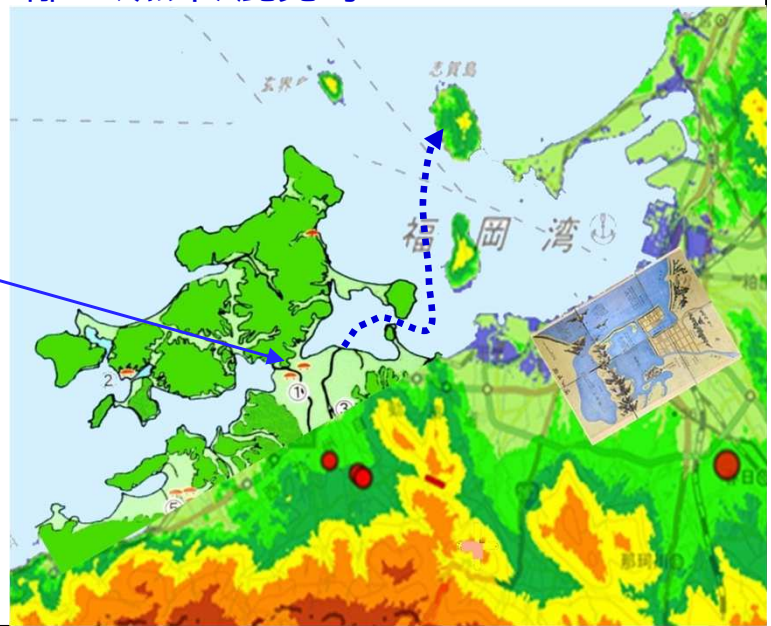
日向三代の解釈と問題点　①

- 邇邇藝命と木花之佐久夜毘売の結婚
  - 笠狭の御前で、木花之佐久夜毘売（神阿多都比売）と出会う。
  - 親の大山津見神は大喜びで、姉を添え、祝いの品物と一緒に、娘達を送り出した。
    - 醜い姉（石長比売）を追い返えされた。 長寿では無くなるとのやりとりがあった。
  - 一晩で妊娠したのはおかしいと云われ、火の産屋の出産。
- この話を歴史としてどう読むか？
    - 木花之佐久夜毘売の話 ： 一夜で妊娠した。 これを邇邇芸命達は疑った。
    - このような事態は、婚姻自体に、何も問題が無ければ、起きない事態。
    - 一晩寝て、翌日からは離れ離れに暮らしたことになる。
    - 又、邇邇芸命との一晩の性交で妊娠は有り得ないとの疑いを晴らす必要があった。
  - 木花之佐久夜毘売の父：大山津見神は、石長比売の件で怒り狂い、一晩で木花之佐久夜毘売を連れ戻した。
    - それっきり、絶縁状態を保った。
    - 邇邇芸命の側も、すっかり忘れる/冷えた状態になった。 →在の部族との諍いを象徴。
    - しばらくして、木花之佐久夜毘売の妊娠が発覚し、出産・認知の問題が発生した。
    - ➢ このような状態が有って、初めて、『一晩寝て、翌日からは離れ離れにに暮らした』ことになる。
  - 火の産屋の出産
    - 神話では、産屋に火を放つて燃え盛る時に出産したことになっている。
      - これは「お伽噺」ですが、ベースとなる事象として、東南アジアや奄美地方にも残る風習で、出産直後に体温が下がり健康上の問題発生を避けるため、産屋内で火を焚くことがあり、夏でも、火を焚く。
      - 男共には、火を焚くことは、奇妙な風習に思えるので、産屋の中で火を焚いたことを、殊更に強調して、「お伽噺」を作り上げたものと推察する。
- この話のストーリー展開は、合間、合間に、現実ではない「お伽噺」が入っているが、事件を推測できる事象がしっかりと、書き込まれている。

日向三代の解釈と問題点　②

- 海幸彦/山幸彦の兄弟の争い
  - 海・山の狩猟用の得物の交換　：　山幸彦（弟）が釣り針を紛失し、トラブルとなる。
  - 山幸彦：火遠理命　：　海神の宮訪問・海神の娘＝豊玉姫と結婚
  - 潮満珠・潮乾珠を得て、海幸彦＝火照命が服従。
- この話を歴史としてどう読むか？
  - 執拗な返却要求は、深刻な兄弟の争いが見て取れる。
    - 邇邇芸命の後を継ぐべき兄弟の争いは、王位継承争いと見られる。
  - 海中の竜宮城へ行ったような記述だが、執拗な返却要求に困った弟が、逃げ出し、海人族の島/地域へ行き、その首長の娘と結婚し、海人族の支援を受けて、故郷に戻ったと考える。
  - 潮満珠・潮乾珠は「お伽噺」の道具で、実際は、海人族が、武力・政治力を使い、兄・海幸彦を追い込み、弟が王位継承争いに勝ったことを意味する。
  - 山幸彦：火遠理命が王位継承。
  - 兄・海幸彦は、隼人の祖先になったとされることから、故郷（日向）を離れ、熊本/鹿児島へ

- 日向の地を糸島・前原地区とすると、
  - 到着地は、古糸島半島の付け根部分
  - 海人族の島は志賀の島。安曇族と推定する。



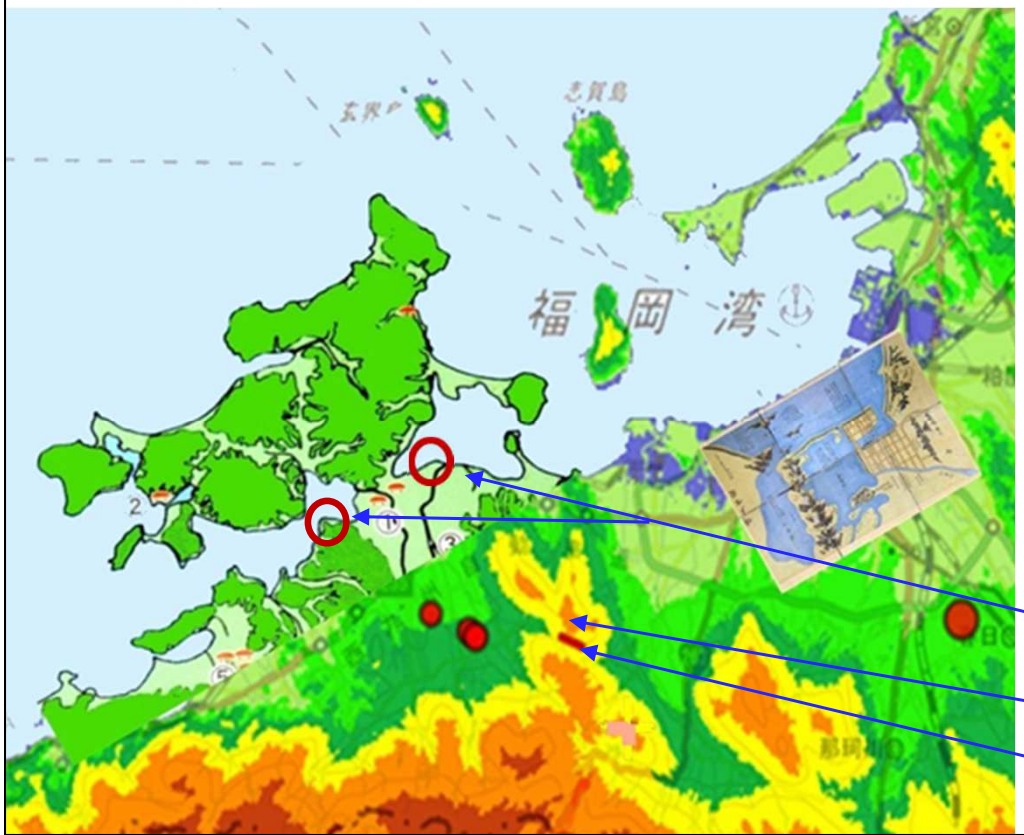
日向三代の解釈と問題点　③

- 鵜葺草葺不合命の誕生
  - 豊玉姫：生む時の鰐の姿を見られ海へ帰る
  - 海人の妹＝玉依姫が乳母として来る
  - 鵜葺草葺不合命が玉依姫と結婚

- この話を歴史としてどう読むか？
  - 山幸彦：火遠理命が、めでたく王位継承を行い、海人族の娘の豊玉姫が正妃となる筈が、仲違いをして、里に帰ってしまっただけのことを、お伽噺風に作り記載したもの。
  - 海人の妹＝玉依姫が乳母となった話は、あり得ることで記述通りと解釈。
  - 但し、姉妹を同時に妻にする話は、記紀には沢山あり、山幸彦：火遠理命が、豊玉姫と玉依姫を妻にしたと解釈する。
    - 記紀では、祖先の時代を古く見せるため、生存期間の引き延ばしだけでは無く、兄弟の王位継承を親子関係として継承したように記述し、系図上の引き延ばしを行ったものと推定。
  - ➢ こう解釈すると、鵜葺草葺不合命については重要な出来事は起きなかったことになる。
    - ➢ 重要なことをしなかった王の名前を、どうしても、残したかった理由が有りそうに思える。
- 妃・姉妹の子供達
  - 姉の子供は、何もせず、名前だけの残った。
  - 妹の子供は、五瀬/神武の4兄弟で、神武東征で、3人は途中犠牲になり神武が成功した。
    - 名前だけ残した鵜葺草葺不合命は、実は、記述しない大事件の立役者・主人公だったのではないか？

日向三代の解釈と問題点　④

- 天孫降臨し、日向三代が活躍した土地が何処かは、議論が有るところ。
- 日向の地を糸島・前原地区とすると、
  - 天孫降臨した先の『吾田の長屋の笠狭碕』と木花之佐久夜毘売と出会った『笠狭の御前』は同じ土地で、古糸島半島の付け根部分の岬と推定される。
  - 海幸彦＝火照命が、王位継承争いに敗れ、遠方へ行った土地は、熊本・鹿児島と考えられ、そこが隼人の地で有ると推測する。
  - 木花之佐久夜毘売の本名は鹿葦津姫/神吾田津姫と云われることから、注記などでは、出会った土地を鹿児島県の大隅隼人の地の阿多とする説があるが、時間の経緯と地理を考えると根拠に問題がある。



- 「ここは韓国に向かい、笠沙の御前を眞来通りて、朝日の直刺す国、夕陽の日照る国なり。故、ここは甚吉き地。」との古事記の記載は、的確なものと考えられる。

1）韓国に近い→鉄の入手・輸入に好都合。
　（反撃の為の武器等の生産に都合が良い）

2）朝日/夕陽がそのまま見られるのが良い土地と云う理由は、旧居住地である高天原は、朝日・夕陽が見られなかったと推定できる。

天の岩戸/天孫降臨/日向三代　の解釈：まとめ

- 天孫一族は、天照大神まで、天之御中主から12代続く家系の主要な物語が、ここから始まることは、天照大神が、歴史上に残る偉大な「王」であったことを示す。
- その天照大神が、同族の須佐之男命の一族と対立し、
  - 高天原に居た天照大神が、須佐之男命に攻められた。
  - 「誓約」により、停戦・休戦が行われたが、須佐之男命が「狼藉」＝戦争を再び仕掛け、高天原は敗戦し、天照大神は逃避した。
  - 遠隔地にいた天孫一族が援軍となり、高天原を取り戻し、逃避していた天照大神が救出された。
  - 須佐之男命は、罰を受け、遠方に追放された。
- 高天原は繁栄し、天照大神の世代から天忍穂耳命の世代に代わった。
  - 須佐之男命が追放されて20－30年後、再び、須佐之男命の子孫＝出雲一族が台頭し、高天原を脅かした。
  - 出雲一族の勢力に押された天忍穂耳命は、厳しい選択をせざる得なかった。
    - 長男の天火明命を出雲族側に送った。（政略結婚/人質として差し出したか？）
    - 次男の邇邇芸命に王権を譲り（三種の神器を渡し）、多くの重臣や、刀鍛冶や鉄・鏡・玉作の生産者、主な武将を添えて、乃ち、ほぼ一国を構成する人員を帯同して、新天地へ移動させた。
  - 新天地に移動した邇邇芸命は、出雲一族の勢力に負けず、新しい国を作り、配偶者を得て、子孫を残した。
    - 配偶者については、その親と争いが発生したり、次の王位継承争いでは、兄弟喧嘩が発生するなどトピックスには事欠かなかったが、海人族の協力を勝ち得て、三代の間に、出雲一族と対抗し、滅ぼす勢力を得たと推定する。
- 出雲一族との争いは、厳しいものが有り、使者を出す/人質を出すなどの戦略を必要とした。
  - その後、記紀には記載がないが、出雲一族との勢力バランスが大きく変わり、天孫一族が有利となった。そして、出雲の国譲りが実行された。 一見、平和裏に行われたようだが、長野県の諏訪まで、建御名方神を追い、命乞いをさせたことは、武力に訴えたものと推定する。（この項は、今回のテーマの範囲を逸脱）
  - 出雲一族は「国譲り」を了承し、実行したが、大和など主要地域は、饒速日命が、勝手に占拠した。
- 天孫一族は、出雲国譲りに成功し、実際に領土・支配するため、大和に移動しようとしたが、饒速日命の反乱が起き、神武東征の軍勢を出すことになった。

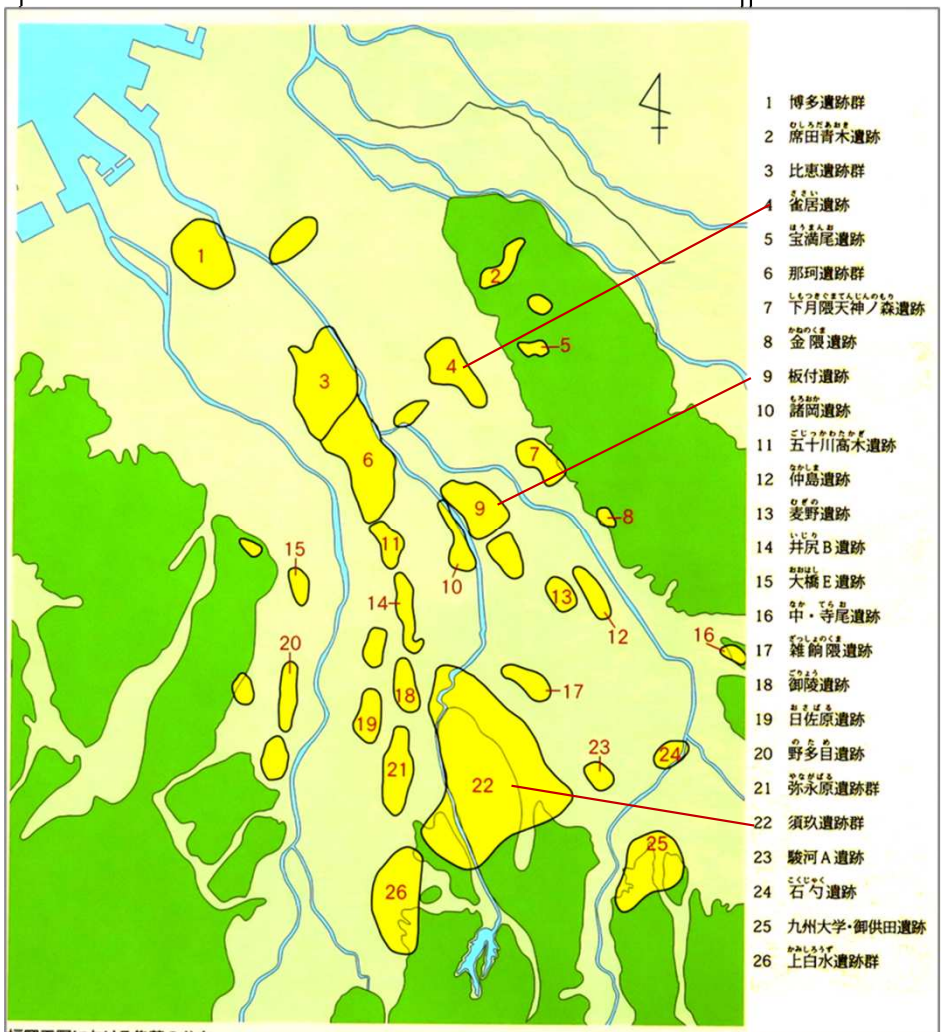
天の岩戸/天孫降臨/日向三代　の解釈：「検証方法」

- **記紀の解釈を検証する**
  - 年代は不明。 天孫族の地域も、高天原の位置も、須佐之男命：出雲族の地域（九州での）も不明。
  - 実際に有ったことならば、遺跡・遺物・伝承などが残るはずだが、検証方法も不明。
  - 考古学成果の発表には、個々のものが多く、全体を俯瞰したものが少なく、見晴らしがきかないのが残念。
  - 記紀神話をベースにして、考古資料等から歴史として解析した研究を探したが、納得できるものは残念ながら見た記憶が無い。 それでは、やってみるしかない。

- **検証の方法**
  - 王が居たならば、王墓があるはず。
    - 弥生時代の王墓から、時代・地理：場所が判るかも。
    - 中国の史書に記載された王は、記紀に記載された可能性がある。 時代が特定可能。
    - 天孫族と須佐之男命/出雲族の区別をつける必要がある。三種の神器が一つの材料。
  - 戦争が行われたことは、明確。
    - 戦争の証拠は、戦傷遺跡、高地性集落（山城）、環濠などから。
    - 青銅の祭器とその埋納は、勢力範囲の推定と戦争の証拠となり得る。
  - 二つの勢力が争ったならば、生活の基盤の違い、土器の違いが有るはず。
    - 土器の分布や集落・技術の違いが有れば、それは補完材料となる。
- もう一つの検証材料は、魏志倭人伝
    - 倭国大乱の記述有り。
    - 卑弥呼擁立。
    - 大倭を置き、女王國以北を監視・一大率を伊都国に置き諸国を検察する。諸國は畏憚する。
    - 日本の歴史では有り得ない奇妙な一夫多妻の記述がある。
    - 狗奴国

考古資料の記述から ①

福岡市博物館
企画展示 2010年度
『奴国発展の礎 -クニグニがまだ小さかった頃-』
展示記録から文章を抜粋
図・地図は別途追加



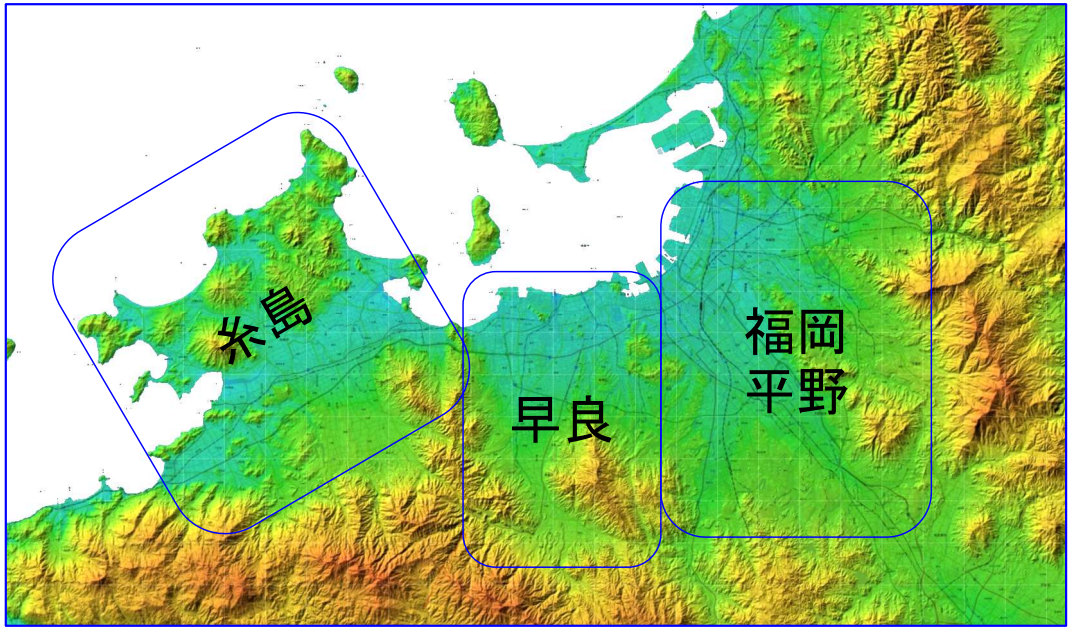
福岡平野における集落の分布

弥生時代の始まりと奴国の始まり

- 後に奴国となる範囲に最初の弥生的な集落として出現したのは、板付遺跡や雀居遺跡(ささいいせき)など、那珂川・御笠川中流域の低い台地の上につくられた集落でした。
- 板付遺跡には、弥生時代の早い段階ですでに環濠や貯蔵穴、人工的な畦(あぜ)や水路を備えた水田など、その後の弥生集落に見られる諸要素がそろっていました。
- 板付遺跡の付近には諸岡遺跡など弥生時代前期の集落があり、この地域に小規模な「ムラ」(数軒の住居が集まった集落) が散在していたことがわかっています。
- 土器のような日常用具にとどまらず、当時の埋葬方法にも見られます。土壙墓(どこうぼ)や埋甕(うめがめ)といった縄文時代からの埋葬方法に加え、この時代には朝鮮半島から支石墓(しせきぼ)や石棺墓(せっかんぼ)という新たな埋葬方法が伝わります。
- やがて、甕棺墓(かめかんぼ)が北部九州で独自に発達したこともあり、同じ時代に営まれた墓地の中に様々な形式の墓が並ぶといった状況も見られました。
- 弥生時代前期の後半になると奄美や沖縄といった南西諸島産の貝を使用した貝輪が北部九州で見られるようになり、山陰や北陸のヒスイを使った玉製品がもたらされるというように離れた地域の文化が入ってくる。

- 考古学の論文を読むが、読み切れない。博物館の展示などの記述は、地域全体を判り易く記述している。考古学者の節が根拠になっているはずで、素人には、有難い。

考古資料の記述から ②



早良 吉武高木遺跡の時代

- 弥生時代前期末から中期初頭の北部九州の文化が流動的になったことが、この時期の土器型式からみてとれます。
- 城ノ越式土器（じょうのこししきどき）という土器型式は、前期の板付式 、中期の須玖式（すぐしき）という長期にわたって安定して存在した土器型式の間にあって、非常に短期間しか継続しなかった型式です。
- この土器型式が長く続かなかったことは、その土器を製作していた集落や家族の構造がこの時期に急激に変わってしまったことを物語ります。

- **吉武高木遺跡3号木棺墓の遺物出土状況**
  - この弥生時代前期末から中期初頭の時期に玄界灘沿岸で勢力を持っていたのが早良平野の吉武高木遺跡 の被葬者たちでした。
  - 吉武高木遺跡3号木棺墓の被葬者は銅剣 ・ 銅戈 ・銅矛の青銅武器、ヒスイ勾玉、そして碧玉製管玉を持ち、近接する他の墓からも武器をはじめとする副葬品が多数出土しました。
  - 早良平野のそれぞれのムラは、 吉武高木のムラと結びつきながらゆるやかな関係を保っていたのでしょう。
  - 早良平野のムラは、次の時代になると奴国のムラに比べ相対的にその力を落としていきます。

考古資料の記述から ③

- **奴国の出現と発展**
  - 奴国の範囲では、吉武高木のムラが全盛期を迎えた弥生中期前半には、青銅器などは多くありませんでした。
    - しかし弥生時代中期後半以降は、ガラスや青銅器の鋳造関連の遺物を中心に新たな文化や技術を積極的に取り入れました。
  - 同時期に比恵・那珂遺跡では集落のあり方が大きく変わりました。
    - いくつかの集落を再構成し、台地上に都市計画のような大溝が掘られ、中期の後半になると大型の建物も出現します。
  - さらにこの時代になると、 平野の南側にある須玖岡本遺跡のようなムラも含めた広い範囲でのまとまりが成立したと考えられます。
  - 弥生時代前期に須玖丘陵の各所に分散していた小さなムラは弥生中期になると急速に拡大し、奴国全体の中心になっていきました。
    - 須玖岡本遺跡の甕棺墓の被葬者は前漢の銅鏡を30面以上持っていて、 奴国の王墓だと考えられています。
  - 奴国は朝鮮半島をこえて中国と直接交易を行うことができる力を持つようになり、 中国の鏡や武器、そして金印「漢委奴国王」を 手にする北部九州の盟主になったのです。

考古資料の記述から ④ 考古資料から歴史把握が可能

福岡市博物館　企画展示　2010年度
『奴国発展の礎 -クニグニがまだ小さかった頃-』
展示記録から

		早良平野	福岡平野（奴国）
弥生前期	前半		板付遺跡や雀居遺跡
			水田・環濠集落
			小規模なムラ
	後半		沖縄・奄美から貝輪
			山陰・北陸からヒスイ
		板付け式土器	
弥生前期末から中期初頭		吉武高木遺跡3号墓	
		銅剣・勾玉の副葬	
		極短期間の間だけ「城ノ越式土器」	
弥生中期	前半	須玖式 土器	
		吉武高木のムラが全盛期を迎えた	比恵・那珂遺跡　大変化あり。都市計画大溝
	後半以降	ガラス・青銅製鋳物など新文化・技術	
			須玖岡本遺跡　広範囲でまとまり
			奴国の中心に
			甕棺墓銅鏡30面：王墓
			中國の漢に朝献し、金印を手にした。

福岡市博物館の展示記録を読み、左図のような時期/地域毎の状況をまとめることが出来る。

- 弥生前期
  - 福岡平野に奴国が有り、弥生時代前期から水田稲作を始め、発展し、前期の後半には、南海や北陸から装飾品を輸入する余裕が出るほど、発展した。
- 早良平野には、王墓が生まれた。
- 弥生中期前半
  - 吉武高木遺跡が全盛期を迎え、
- 弥生中期後半
  - ガラス・青銅器鋳物を生産。
  - 早良から奴国へ勢力の中心が移る。
  - 須玖岡本遺跡、広範囲にまとまり奴国の中心地となる。
  - 須玖岡本の甕棺墓は王墓
  - 中國に朝献
- 異変　→これが何を意味するのだろうか？
  - 土器が板付け式から須玖式に移る間の時期に、短期間だけ別の形式になる。
  - 須玖岡本の北側の比恵・那珂遺跡に大変化が有り、都市計画が実施された。

土器から判る断片的な情報

- 城ノ越式土器は、城ノ越遺跡で発掘された弥生中期初頭の指標土器
  - 城ノ越遺跡の所在地は遠賀川の下流域。
  - 城ノ越式土器は、遠賀川流域由来か？
- 「朝鮮半島出土弥生系土器から復元する日韓交渉」 石丸あゆみ著の中で、気になったこと。
  - 勒島遺跡では、最も多くの弥生土器が流入する。
    須玖II式の袋状口縁壺などの糸島地域特有の土器が多く原ノ辻にもたらされることから、原ノ辻を中継地とした交易に糸島地域の集団が深く関わっていると考えられる。
  - 鉄鉱山にある蔚山達川遺跡出土の壺は、須玖II式の北部九州からの搬入品。鉄器生産に直接関係する遺跡から弥生系土器が出土した意味は大きい。
  - 韓国との交易に携わったのは、糸島地域で、土器をもたらし鉄鉱山からの鉄・鉄器を輸入したと考えられる。
    - その時期は須玖II式の時代
- 以上は、土器から判る、断片的な情報。

城ノ越貝塚

遠賀町の上別府にある城ノ越貝塚遺跡は弥生時代の貝塚を主体としています。貝塚とは今でいうごみ捨て場のようなもので、捨てられていたものから、当時の人々の生活を知ることができます。

城ノ越遺跡からはヤマトシジミを主に多量の淡水産貝類、動物骨が出土されました。また、多種の土器や石鏃、石斧、石剣、砥石、石包丁も出土しました。層の最下層の土器は弥生時代前期末のものと位置づけられており、これに続く弥生時代中期初頭の土器は「城ノ越式土器」と命名されることとなりました。「城ノ越式土器」は北部九州の土器が作られた年代を知るうえでの重要な標識となっているのです。

遺物の分布範囲は約400平方メートルにわたり、丘陵上には集落があったであろうと推定されています。

表6　弥生土器と粘土帯土器の併行関係に関する研究成果

弥生時代		土器型式	後藤直 1979	片岡宏二 1990	武末純一 2003	白井克也 2001	安在晧 徐姈男 1990	申敬澈 鄭澄元 1987	安在晧 洪潽植 1990	李在賢 2003	李昌熙 2004
前期	初頭	夜臼Ⅱb式 板付Ⅰ式	円形粘土帯土器	松菊里式	松菊里式	円形粘土帯土器	円形粘土帯土器	円形粘土帯土器	円形粘土帯土器	円形粘土帯土器	円形粘土帯土器
前期	中頃	板付Ⅱa式		円形粘土帯土器	円形粘土帯土器						
前期	後半	板付Ⅱb式									
前期	末	板付Ⅱc式									
中期	初頭	城ノ越式	勒島式	勒島式	勒島式	勒島式	勒島式	勒島式	勒島式	勒島式	勒島式
中期	前半	須玖Ⅰ式				勒島式					
中期	後半	須玖Ⅱ式			瓦質土器	瓦質土器		瓦質土器	瓦質土器		瓦質土器
後期	前半	高三潴式		瓦質土器 軟質土器							軟質土器
後期	後半	下大隈式									
後期	末	西新式									
日本			韓国								

王墓　①　早良平野

- 早良平野の吉武高木遺跡で最古の王墓　福岡市博物館のHPより
  - 吉武高木遺跡では弥生時代前期末～中期後半の甕棺墓34基、木棺墓4基、土壙墓13基が発見されました。
  - 成人の墓には標石をもつものもあります。
  - ここからは甕棺墓8基と木棺墓4基から細形銅剣9口、細形銅戈1口、細形銅矛1口、多鈕細文鏡1面、銅釧(どうくしろ)2個、ヒスイ製の勾玉、碧玉製の管玉などが出土しました。
  - 特に、3号木棺墓には細形銅剣2口、細形銅矛1口、細形銅戈1口、多鈕細文鏡1面、ヒスイ製勾玉、碧玉製管玉類が納められ、この墓地の中心的な墓と考えられています。

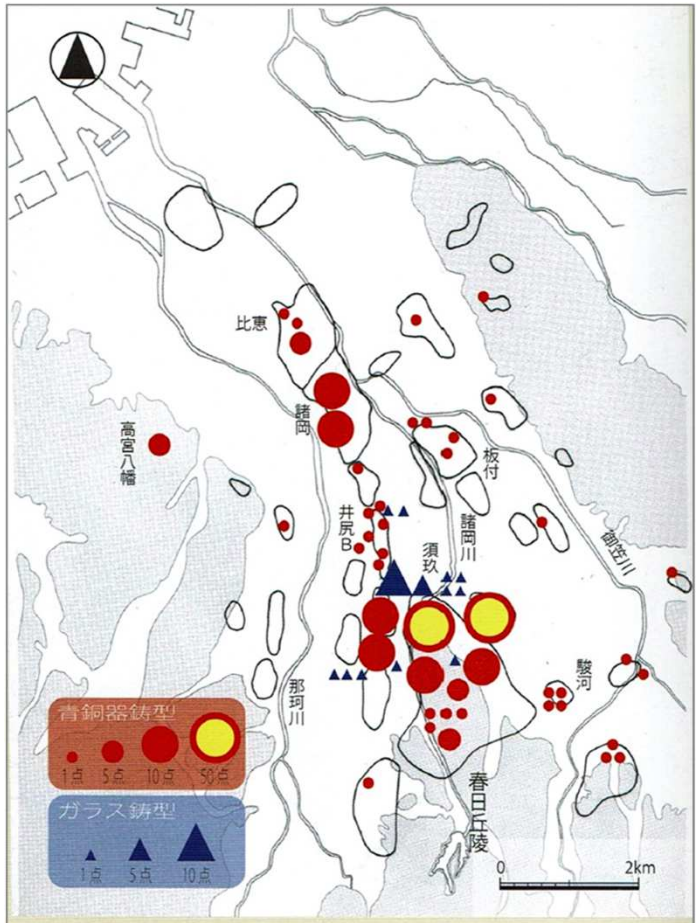
王墓　②　福岡平野　須玖岡本の王墓

連弧文「清白」鏡
王墓に副葬されていた前漢鏡の中には中型品、小型品も含まれていた。径18.5cm。

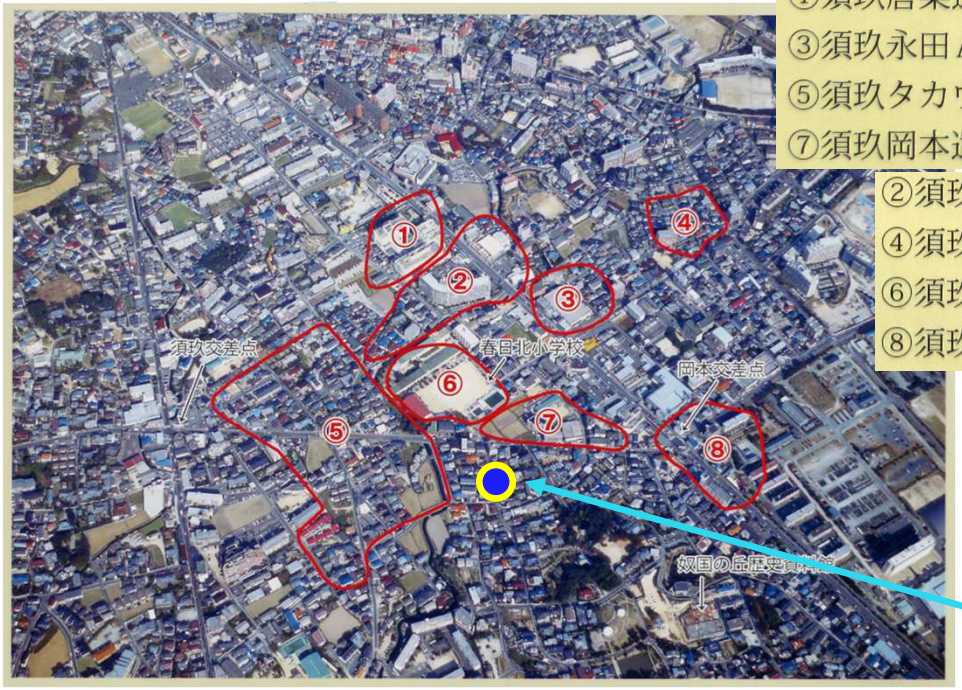
ガラス勾玉
頭部に細かい溝をもつ丁子頭定形勾玉で、表面が風化するが、本来は鮮緑色。弥生時代の勾玉は、ガラス製のものが最も価値が高く、さらに5cmを超える本品は最大級である。長さ5.2cm。九州大学。

多樋式銅剣
通常の銅剣に比べ異形を呈しており、剣身の片面に「樋」と呼ばれる溝が4条通るため、この名称がつけられている。国内では本例のみで、朝鮮半島でも2例しか確認されておらず、生産地についても諸説がある。長さ35.1cm。東京国立博物館。(春日市1995から転載)

王墓の復元模型



福岡平野の青銅器鋳型出土分布図



須玖遺跡群北部の青銅器工房跡

①須玖唐梨遺跡（鉄器工房跡）
③須玖永田Ａ遺跡（青銅器工房跡）
⑤須玖タカウタ遺跡（青銅器工房跡）
⑦須玖岡本遺跡坂本地区（青銅器工房跡）
②須玖五反田遺跡（ガラス工房跡）
④須玖黒田遺跡（青銅器工房跡）
⑥須玖坂本Ｂ遺跡（青銅器工房跡）
⑧須玖尾花町遺跡（青銅器工房跡）

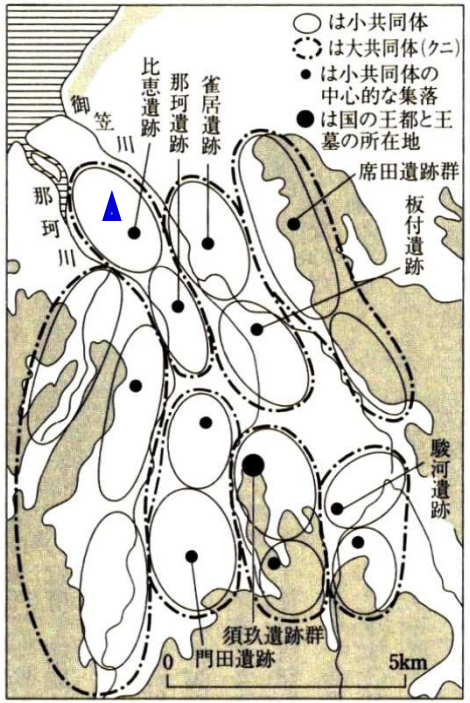
須玖岡本王墓出土地

須玖遺跡群について　寺沢薫氏の説明

- 王墓が出土した須玖岡本遺跡を中心に遺跡が密集する。この遺跡群は『弥生最大のテクノポリス”という名誉ある称号を冠されている。』 青銅器や鉄器、ガラス製品が生産されていた。
- ある時期になると、様相が一変し、かつてのテクノポリスや王墓は影を潜めた。
  - 後期前葉には北に広がる低地に中心を移し、須玖永田遺跡や須玖黒田遺跡では一辺七十メートルもの方形区画を誕生させるまでになった。また、須玖唐梨遺跡と五反田遺跡では二百メートルにわたって直線的な溝が復元され、方格に地割りされた都市的な集落も想定されている。
  - しかし三世紀になると、それも次第に衰退を始めた。

✓ 須玖遺跡群は、最大のテクノポリスで、ナ国の首都であったが、ある時期から、凋落し、都市計画に基づいた集落に置き換わった。

✓ これは、戦争の結果、奴国が敗北し、占領され、その技術を戦勝国が使用し、新しい生産基地を作成したものと、解釈できる。



ナ国の領域 中心をなす須玖遺跡群はクニ(＝大共同体)に匹敵する

須玖遺跡群と「ナ」国王墓　　「王権誕生」158P～

一方、ナ国の王墓はどうだろう。ナ国の中心は福岡県春日市須玖遺跡群だ。春日丘陵北半を中心とする南北約二キロ、東西一、二キロの範囲にある。丘の上には中期から後期にかけての五十ヵ所もの集落や墓地が所狭しと密集している。近畿でこの広さであれば、そっくり小共同体の規模だ。

だが、遺跡の密度や内容からすると大共同体(クニ) にも匹敵する。須玖遺跡群自体が都市的景観をもったクニそのものなのだ。しかもここでは中期後半以来、数々のムラで青銅器や鉄器、ガラス製品が生産されていた。青銅器の鋳型は福岡平野のじつに七割以上がここから出土していて、考古学者から弥生最大のテクノポリス”という名誉ある称号を冠されている。

こうした先端技術集団を抱え、金属器などの集中的生産を基盤として、中期末には須玖岡本遺跡に王墓が出現した。一八九九(明治三十二)年、巨大な板石の下の甕棺から前漢鏡約三十面、中細形鋼 矛五、中細形銅戈一、多樋式銅剣一、ガラス製璧二、ガラス製勾玉一、ガラス製管玉十二が出土した。周辺に他の甕棺がないことや、現在の宅地割りの形から、ここでも大きな方形の墳丘が存在した可能性があるという。ナ国王である彼もまた、イト国王と並ぶ「王のなかの王」だったのだ。

三世紀の奴国　　「王権誕生」276P～

一方奴国では、三世紀になると春日丘陵上の環境をめぐらす集落群が次々に解体し、かつてのテクノポリスや王墓は影を潜めてしまった。旧ナ国の王都だった須玖遺跡群も、後期前葉には北に広がる低地に中心を移し、須玖永田遺跡や須玖黒田遺跡では一辺七十メートルもの方形区画を誕生させるまでになった。また、須玖唐梨遺跡と五反田遺跡では二百メートルにわたって直線的な溝が復元され、方格に地割りされた都市的な集落も想定されている。しかし三世紀になると、それも次第に衰退を始めた。

旧ナ国王の威光は、王のなかの王であったかつてに比べると衰退し、国内の各オウやかつて連合を 形成した他国の王との階級的格差はしだいに縮まってきたのである。伊都国とは違い三世紀の奴国は 大きな転換を強いられたようなのだ。

王墓③　前原・平原地域

- 平原王墓
  - 弥生時代後期・古墳時代直前の時代に
  - 三種の神器が揃い
  - 飛びぬけて、充実した副葬品が出土。
  - 日本最大の大型銅鏡 5枚は、圧巻。
- 三雲南小路王墓・井原鑓溝王墓
  - 平原王墓に先行する王墓
  - 三種の神器や充実した副葬品
  - 共に甕棺墓

30—1 銅鏡の大きさの比較

23—1 銅鏡の出土枚数比較図

三雲南小路王墓では1号、2号甕棺合せて57枚に上る大量の銅鏡が出土した。これほどの鏡の大量副葬は弥生時代はもとより、古墳時代に入ってからも突出しており、ほとんど例がない。

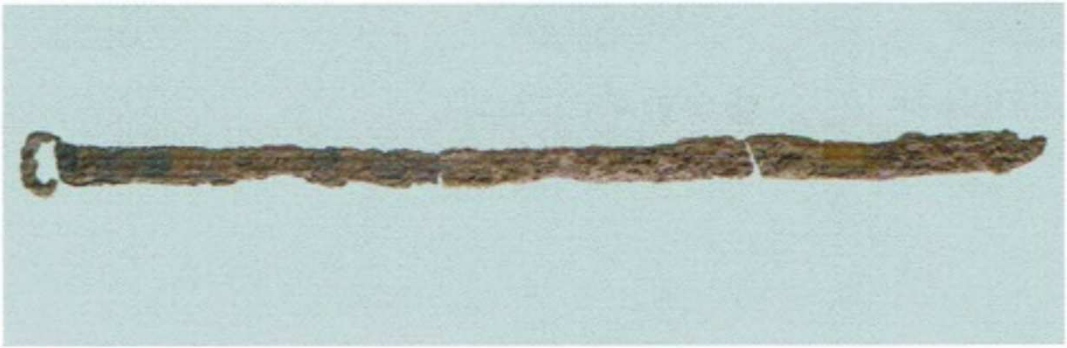
平原王墓の出土品

糸島新聞社
2006年5月
記事より

- 古墳時代以前の墳墓で、大和朝廷の三種の神器と同じに
  太刀・鏡・勾玉が出土。 鏡は、46.5cmの巨大なもの、
  - 八咫鏡（やたのかがみ）のサイズに該当。

26－1 姿を現した平原遺跡
中央の方形周溝墓が王墓である平原1号墓。昭和40年の発掘調査当時の写真。

伊都国歴史博物館常設展示図録より４点

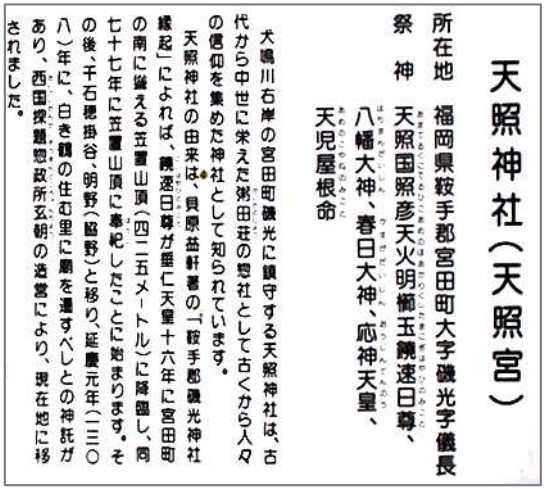


⑦素環頭大刀
全長 80.2 cm。ほとんど反りを持たず、直線状をなす。

飯塚立岩遺跡

- 立岩(たていわ)遺跡　飯塚市
- 弥生時代の甕棺墓43基、貯造穴26基など。
- 前漢鏡10面、細形銅矛、鉄検などが副葬品として出土。
- ゴウホラ貝の腕輪

- 王墓　10号甕棺
  - 三雲王墓と同じ立岩(古)に相当
  - 清白銘鏡3面を含む10号甕棺は、夏華の基準でいう侯王墓(王墓では無い)
  - 中細形銅矛の副葬
  - 大型化された武器型鉄器の鍛造鉄戈+鉄剣



天照神社（天照宮）

所在地　福岡県鞍手郡宮田町大字磯光字儀長

祭　神　天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊、
八幡大神、春日大神、応神天皇、
天児屋根命

犬鳴川右岸の宮田町磯光に鎮守する天照神社は、古代から中世に栄えた粥田荘の惣社として古くから人々の信仰を集めた神社として知られています。

天照神社の由来は、貝原益軒著の「鞍手郡磯光神社縁起」によれば、饒速日尊が垂仁天皇十六年に宮田町の南に聳える笠置山頂(四二五メートル)に降臨し、同七十七年に笠置山頂に奉祀したことに始まります。その後、千石穂掛谷、明野(昭野)と移り、延慶元年(一三〇八)年に、白き鶴の住む里に廟を遷すべしとの神託があり、西国探題惣政所玄朝の造営により、現在地に移されました。

寺沢薫氏の「王墓」に関する見解

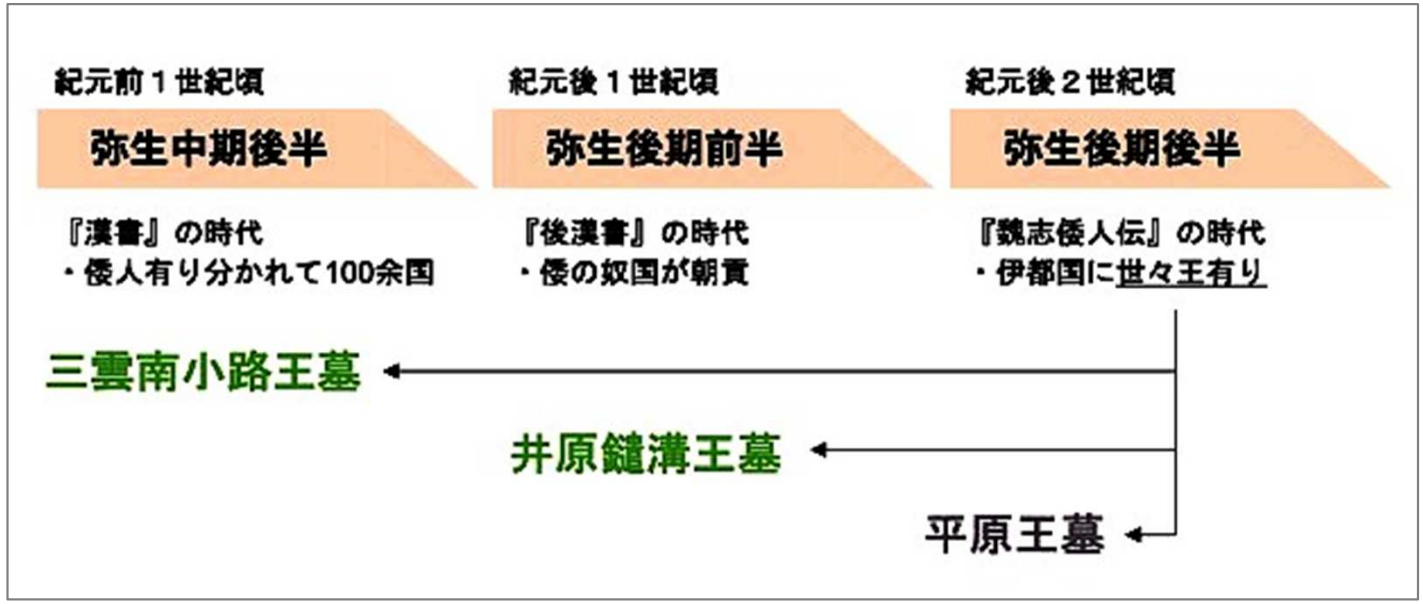
- ✓ 寺沢薫氏の著書「王権誕生」の年表と中公選書「卑弥呼とヤマト王権」の両著書から抜粋

- 紀元前2世紀頃:
  - 北部九州でクニから国への統合が始まる
- 紀元前1世紀頃:
  - ナ国を中心に巨大な青銅器生産のテクノポリス形成。
  - ナ国やイト国がより大きな部族的国家連合の形成が始まる。
- 西暦5年:中国･「新」へ東夷王 大海を渡り朝献
  - 須玖岡本遺跡の王墓ー東夷王の墓と推定
- 西暦57年:倭の奴国王が後漢に朝献 金印受領
  - 三雲南小路遺跡の王墓ー倭の奴国王と推定(ナ国王で奴国全体の王)
- 西暦107年:倭国王･師升後漢に朝献　生口160人献上
  - 井原鑓溝遺跡の王墓-師升と推定

中国	日本	東アジアの主な出来事	列島の主なできごと（カッコ内は関係する遺跡や遺物）
前漢	弥生中期	前二〇六　漢の劉邦、秦を滅亡	北部九州でクニから国への統合が始まる。
		前一四一　武帝、即位	この頃、青銅の武器形祭器と銅鐸を使ったマツリ始まる。〈青銅のマツリの第1段階〉
		前一〇八　衛氏朝鮮滅亡、漢、四郡設置	倭人は「百余国」に分かれていた。（『漢書』地理志）
			北部九州の戦争激化し広域化する。（吉野ケ里や西小田遺跡の「首なし」「首だけ」人骨）
			ナ国を中心に巨大な青銅器生産のテクノポリス形成。（福岡・須玖遺跡群）
		前三三　成帝即位	近畿でもオウや首長の住処、高殿が出現。（池上曽根遺跡の巨大高殿、唐古・鍵遺跡、加美遺跡）
			近畿各地に青銅器を作るムラ点在。
			西日本各地で独自性のある青銅器のマツリが生まれる。〈青銅のマツリの第Ⅱ段階〉
			ナ国やイト国がより大きな部族的国家連合の形成が始まる。王のなかから王が出現し、楽浪を通じ漢と交渉をもつ。（三雲南小路遺跡の王墓、須玖岡本遺跡の王墓）
新		五　東夷王大海を渡り国珍を奉ず。漢書王莽伝。	北部九州に対する緊張感が高まり、瀬戸内海沿岸を中心に高地性集落がさかんにつくられる。〈第一次高地性集落〉（香川・紫雲出山遺跡）
			須玖岡本遺跡の王墓ー東夷王の墓と推定（卑弥呼とヤマト王権）
			北部九州に対する呪禁として、近畿とイツモで青銅器の大量埋納が行われる。（兵庫・桜ケ丘遺跡の銅鐸・銅戈の埋納、荒神谷/加茂岩倉遺跡の銅剣、銅矛や銅鐸の埋納）
後漢		五七　正月、倭の奴国王が後漢に朝貢し、光武帝より印授。（『後漢書』東夷伝）（福岡・志賀島で発見された「漢委奴国王」の金印）	
			三雲南小路遺跡の王墓ー倭の奴国王と推定
			中期の古い銅鐸がほとんど埋納され、銅鐸と銅矛がしだいに二極化して大形化する。〈青銅のマツリの第Ⅲ段階〉
	後期	一〇七　倭国王帥升ら後漢王朝に朝貢し、生口百六十人を献じる。（『後漢書』東夷伝）	
			この頃イト国を盟主とするイト倭国が成立。（井原鑓溝遺跡の王墓ー倭国王帥升と推定）
後漢	弥生後期	一四〇　羌族前漢陵を焼く	この頃には、『魏志倭人伝記載の国々存在か。（邪馬台国は「ヤマト―狗奴国は濃尾平野か）（近畿式銅鐸と三遠式銅鐸）
			鏡を割る儀礼増える。（福岡平原遺跡一号墓（最後のイト倭国王墓））
			この頃、キビで銅鐸のマツリが終焉。（岡山・高塚遺跡銅鐸埋納）
		一九〇	「倭国乱れ相攻伐すること歴年」（『後漢書』東夷伝）
			後漢王朝の衰退によって、イト倭国の権威失墜。
			第二次高地性集落の後半期に、分布が東西に広がる。（大阪・東山遺跡）

伊都国歴史博物館の「王墓」の見解

- 三雲・井原遺跡｜伊都国歴史博物館で見る、伊都国を治めた王たちの墓
  - 2つの王墓の時代
    - 三雲南小路王墓（みくもみなみしょうじ）は弥生時代中期の後半（紀元前1世紀）の王墓だと考えられています。
    - この時期は『漢書』に「倭人の社会は百余国に分かれていて、朝貢してきている」と記されている時代です。
    - 一方、井原鑓溝王墓（いはらやりみぞ）は弥生時代後期前半（紀元後1世紀）だと考えられています。
      - こちらは『後漢書』に伊都国の隣の奴国（いまの福岡県福岡市と春日市）が後漢の皇帝から金印を下賜された時代です。



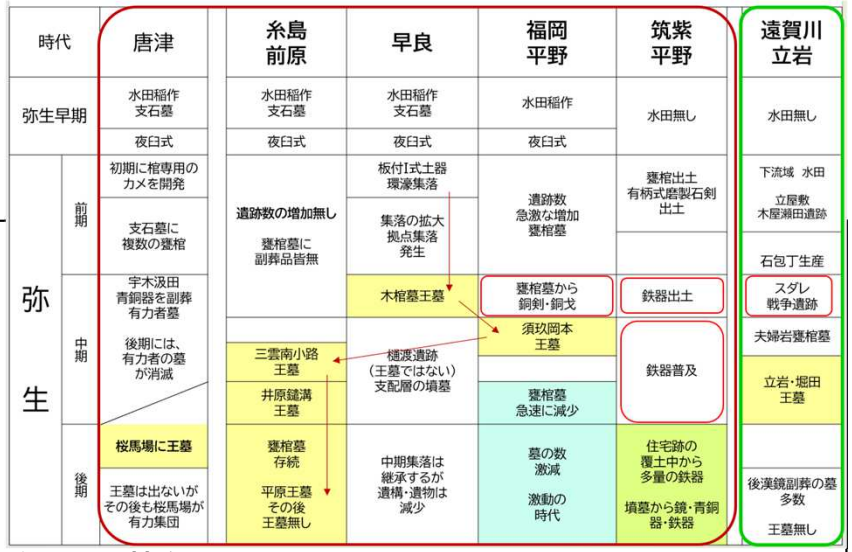
須玖岡本王墓

北九州の主要地区と王墓

副葬品として、剣・勾玉・鏡が出土する地域

時代		唐津	糸島 前原	早良	福岡 平野	筑紫 平野	遠賀川 立岩
弥生早期		水田稲作 支石墓	水田稲作 支石墓	水田稲作 支石墓	水田稲作	水田無し	水田無し
		夜臼式	夜臼式	夜臼式	夜臼式		
弥生	前期	初期に棺専用の カメを開発	**遺跡数の増加無し** 甕棺墓に 副葬品皆無	板付I式土器 環濠集落	遺跡数 急激な増加 甕棺墓	甕棺出土 有柄式磨製石剣 出土	下流域　水田 立屋敷 木屋瀬田遺跡
		支石墓に 複数の甕棺		集落の拡大 拠点集落 発生			石包丁生産
	中期	宇木汲田 青銅器を副葬 有力者墓 後期には、 有力者の墓 が消滅		木棺墓王墓	甕棺墓から 銅剣・銅戈	鉄器出土	スダレ 戦争遺跡
			三雲南小路 王墓	樋渡遺跡 （王墓ではない） 支配層の墳墓	須玖岡本 王墓	鉄器普及	夫婦岩甕棺墓
			井原鑓溝 王墓		甕棺墓 急速に減少		立岩・堀田 王墓
	後期	**桜馬場に王墓**	甕棺墓 存続 平原王墓 その後 王墓無し	中期集落は 継承するが 遺構・遺物は 減少	墓の数 激減 激動の 時代	住宅跡の 覆土中から 多量の鉄器 墳墓から鏡・青銅 器・鉄器	
		王墓は出ないが その後も桜馬場が 有力集団					後漢鏡副葬の墓 多数 王墓無し

北九州の主要地区の戦争と王墓と戦争遺跡の分布図から　読む



- 遠賀川流域は、弥生早期の水田は無く、弥生前期から開拓
  - 平坦な土地が多く、弥生前期から中期に水田耕作地が増加
  - 早良・福岡の王墓の後の時代に、王墓相当が生まれる。
  - 何故か、王墓は無くなるが、遺跡は相変わらずあり、栄える。
- 筑紫平野は、前期初めの戦争にも参加、勝組。
  - 武器や鉄器の出土が続き、中期の戦争も後期の戦争でも勝ち組。王墓無。
- 福岡平野は、早期から栄え、中期には、王墓が生まれた。
  - しかし、その後、甕棺・その他の墓も急激に減少。敗者となったと思われる。
- 早良平野は、早期から栄え、前期に急激に遺跡数を拡大し、王墓が生まれた
  - 王は福岡平野へ移動か？
  - 中期には、激しい戦争に参加し、勝組、後期にも戦争に参加し、勝組。
- 糸島・前原は、早期に水田があったが、前期には遺跡数が増加せず、発展に取り残された地区
  - 中期に突如、王墓が出現。王墓が、後期まで継続する。中期の戦争も後期の戦いにも勝組。
  - 早良・福岡・糸島・前原の3地域の王墓は、勾玉、銅鏡、剣の三種の神器が出土し、同族と見える。
- 唐津は、初期・中期・後期の戦争に参加。
  - 中期には、宇木汲田に有力者の墓が生まれたが、
    - 何故か、中期後半にその地域は衰え、別の地域に王墓出現。
  - 有力者の置き換わりは、中央の地域の戦争の結末を受けたものか？
  - 宇木汲田では、同一甕棺からではないが、勾玉、銅鏡、剣が出土。

- 福岡平野の須玖岡本の王墓は、その後、地域が荒廃したことが、中期の戦争の解釈のポイントになると思われる。

王墓の条件

- 王墓の条件は、豪華な副葬品を持つこと。
- 早良の最古の王墓の決め手は、三種の神器と同じ、剣・鏡・勾玉の出土。
  - 三種の神器は、天孫一族の王の印
  - 神話上で対抗する出雲一族の王墓は、この時期の考古資料では特定できていない。
    - 墳墓が発生し、四隅突出墓・帆立貝型古墳・方墳・円墳・前方後方墳・前方後円墳が有る。
      - 出雲族の王墓は、四隅突出墓と見られるが、北九州には存在しない。

- 三種の神器を副葬した墓を天孫一族の王墓とすると、
  - その地域の墓制の特徴は、
    - 外の地域には無い甕棺墓制
    - 副葬品が充実。 青銅製武器・鏡・勾玉/管玉などの副葬品が有る。
  - 甕棺と充実した副葬品が有る地域は、天孫の地域と見る。

- 甕棺の分布図を見ると、天孫族の動静が窺える。
  - 甕棺について時代毎にまとめた資料がネット上で検索できる。
    - 著者は歴博の藤尾慎一郎氏と思われる。 URLは下記
    - https://wi12000.folder.jp/forGmap/html/kamekan hen.html
  - 内容は、藤尾慎一郎著「九州の甕棺-弥生時代甕棺墓の分布とその変遷-」(1988年10月31日稿了)の添付資料と同一なものが多い。

  - 甕棺の時代別分布図から天孫族の動静を次頁以降に見る

甕棺の時期別・分布図の前提条件

甕棺の時期大別の指標

橋口編年		KⅠ			KⅡ			KⅢ			KⅣ			KⅤ					
		a	b	c	a	b	c	a	b	c	a	b	c	a	b	c	d	e	f
弥生時代		前期			中期						後期								

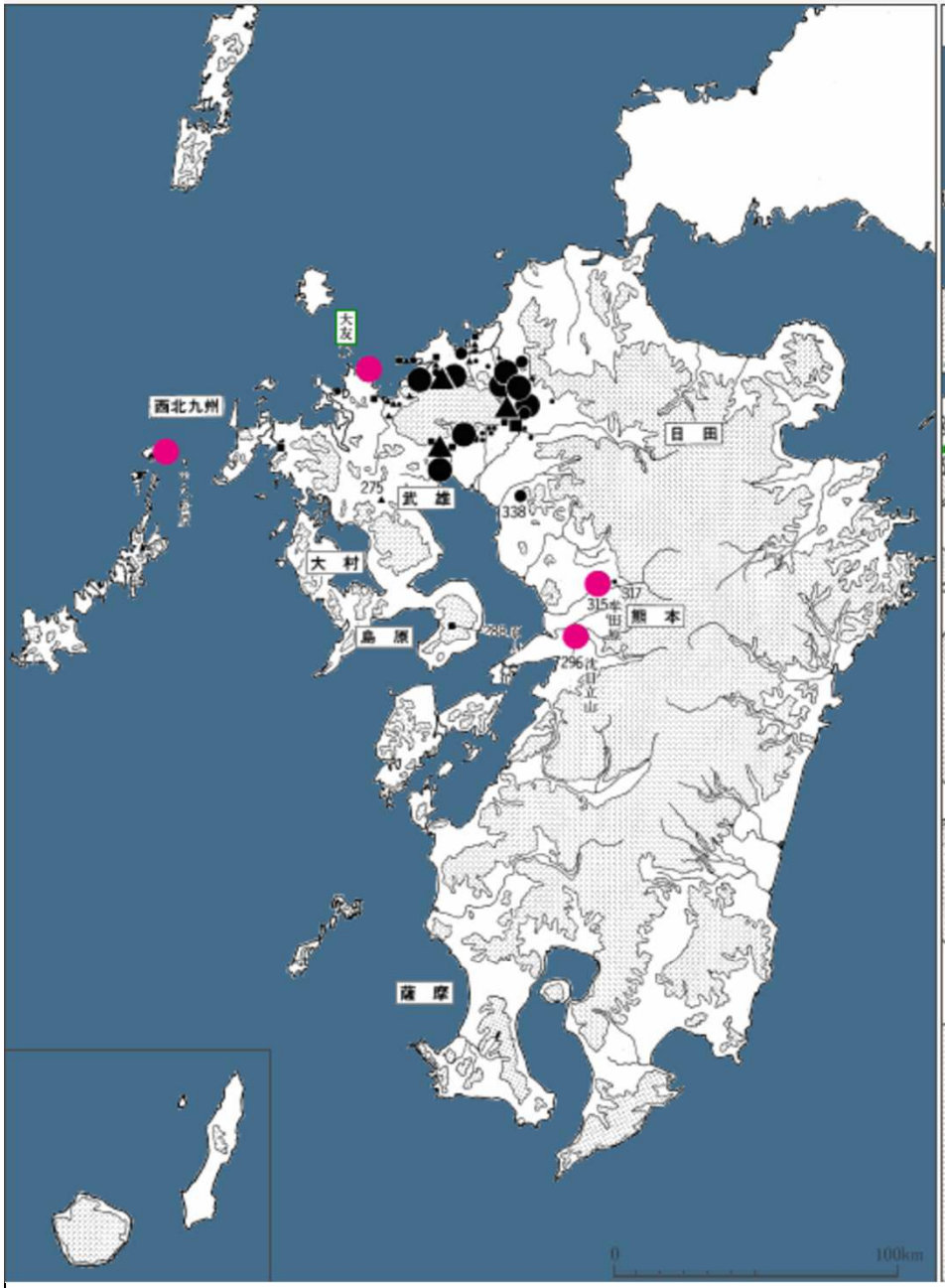
藤尾編年 (1988-) 以降		Ⅰ			Ⅱ			Ⅲ		Ⅳ			Ⅴ
		刻目突帯文	板付Ⅰ	伯玄社	金海	城ノ越	汲田	須久	立岩(古)	立岩(新)	桜馬場	三津永田	日佐原
弥生時代		前期			中期					後期			
製作技法		壺の製作技法			甕棺独自の製作技法の成立 器高80cm			焼成法の進歩 器面調整技法の確立 器高1m					
系列	大型棺									器高低下			
	中型棺									器高増大			
分布		唐津・早良 佐賀・神埼 福岡・春日へ			南筑後・熊本 大村へ			嘉穂		熊本で衰退 福岡で衰退 佐賀で衰退			残存甕棺墓 日田・糸島で特殊に展開
副葬品					漢以前の半島系青銅器			半島系・前漢 九州産青銅器 鉄製武器		王莽・後漢鏡 楽浪漢墓系 九州産青銅器			

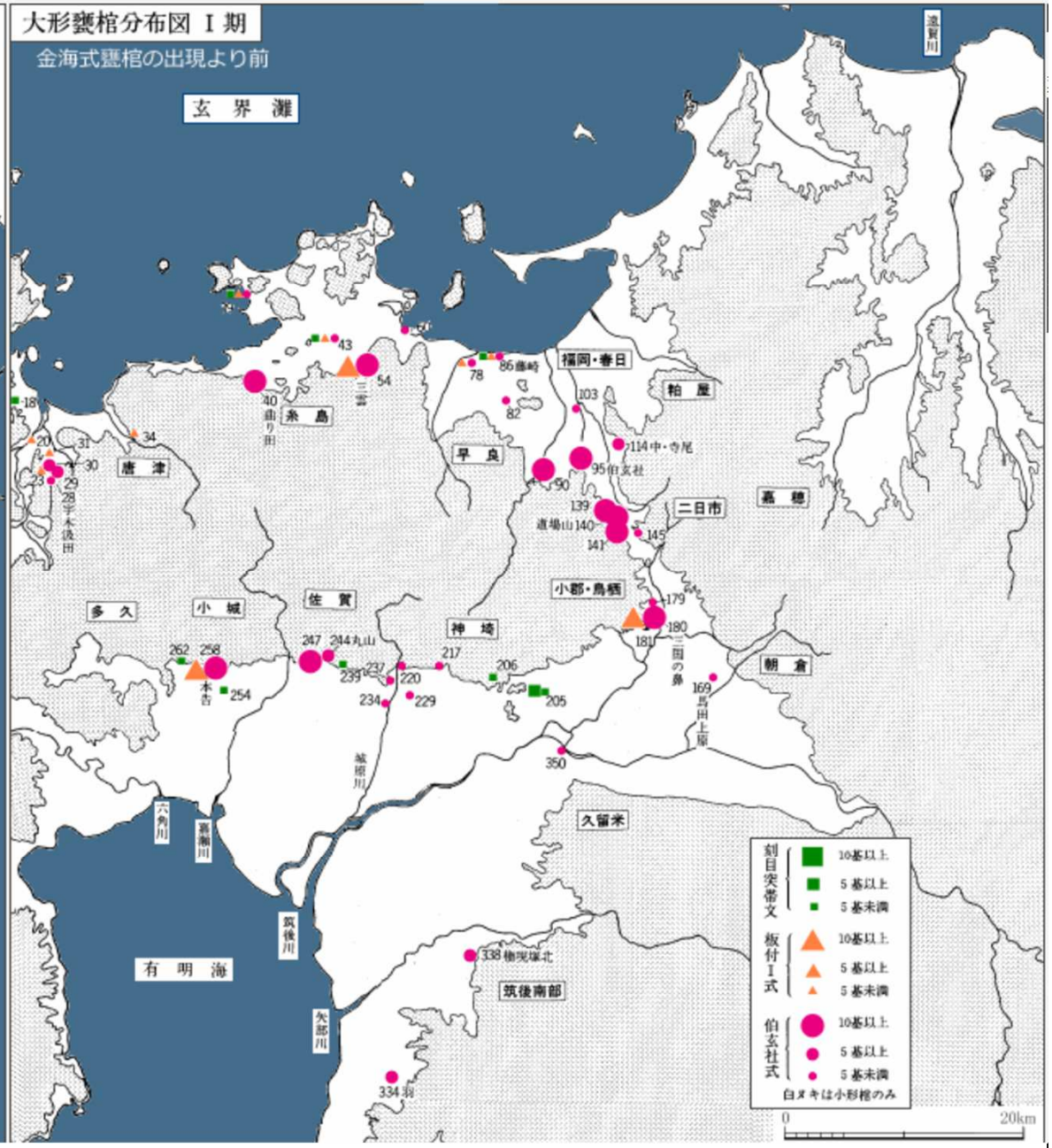
地域毎の時期別基数

地域	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	大形棺計	時期不明	補正大形棺計	甕棺総基数
西北九州	27	7	1	1	2	38	74	75	158
唐津	21	58	48	15	2	144	142	215	331
糸島	65	30	19	10	3	127	6	130	215
早良	11	59	57	10	9	146	1,064	708	1,586
福岡・春日	36	14	327	27	2	406	878	845	1,769
粕屋	0	1	26	1	3	31	32	47	77
嘉穂	0	2	31	3	0	36	210	141	293
二日市	35	8	30	58	0	131	106	184	241
朝倉	2	60	152	52	3	269	538	538	900
小郡・鳥栖	29	111	86	151	2	379	1,964	1,361	2,522
神埼	19	155	144	33	0	351	2,548	1,625	2,951
佐賀	38	92	37	1	6	174	230	289	454
小城	4	2	3	5	0	14	384	206	464
多久	0	37	93	2	0	132	40	152	233
武雄	3	2	3	4	0	12	0	12	15
大村	0	1	7	7	0	15	0	15	30
島原	5	1	5	5	0	16	40	36	65
熊本	29	8	27	0	0	64	84	106	175
筑後南部	9	50	8	3	24	94	166	177	297
久留米	1	20	38	2	4	65	46	88	157
日田	0	0	0	3	3	6	16	14	19
鹿児島	0	0	3	0	0	3	0	3	3
合計	334	718	1,145	393	63	2,653	8,568	6,967	12,955

- 1988年の段階の資料で、この中には、含まれていない甕棺が計4500件あると、断り書き。
  - 筑紫野市の隈・西小田:1800件、神崎郡吉野ヶ里:1500件、福岡市の吉武遺跡:1200件

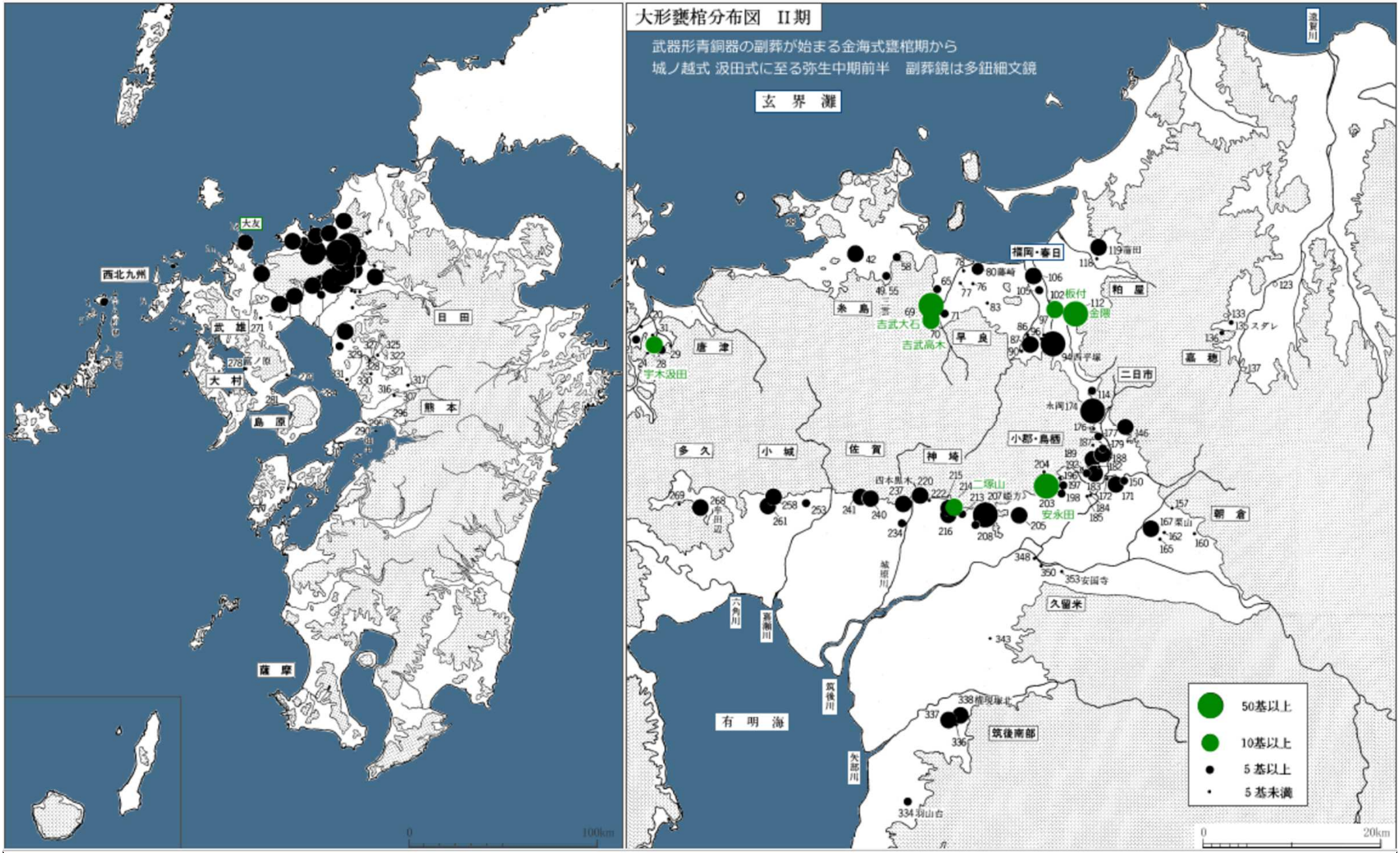
Ⅰ期 （刻目突帯文/板付I/伯玄社）





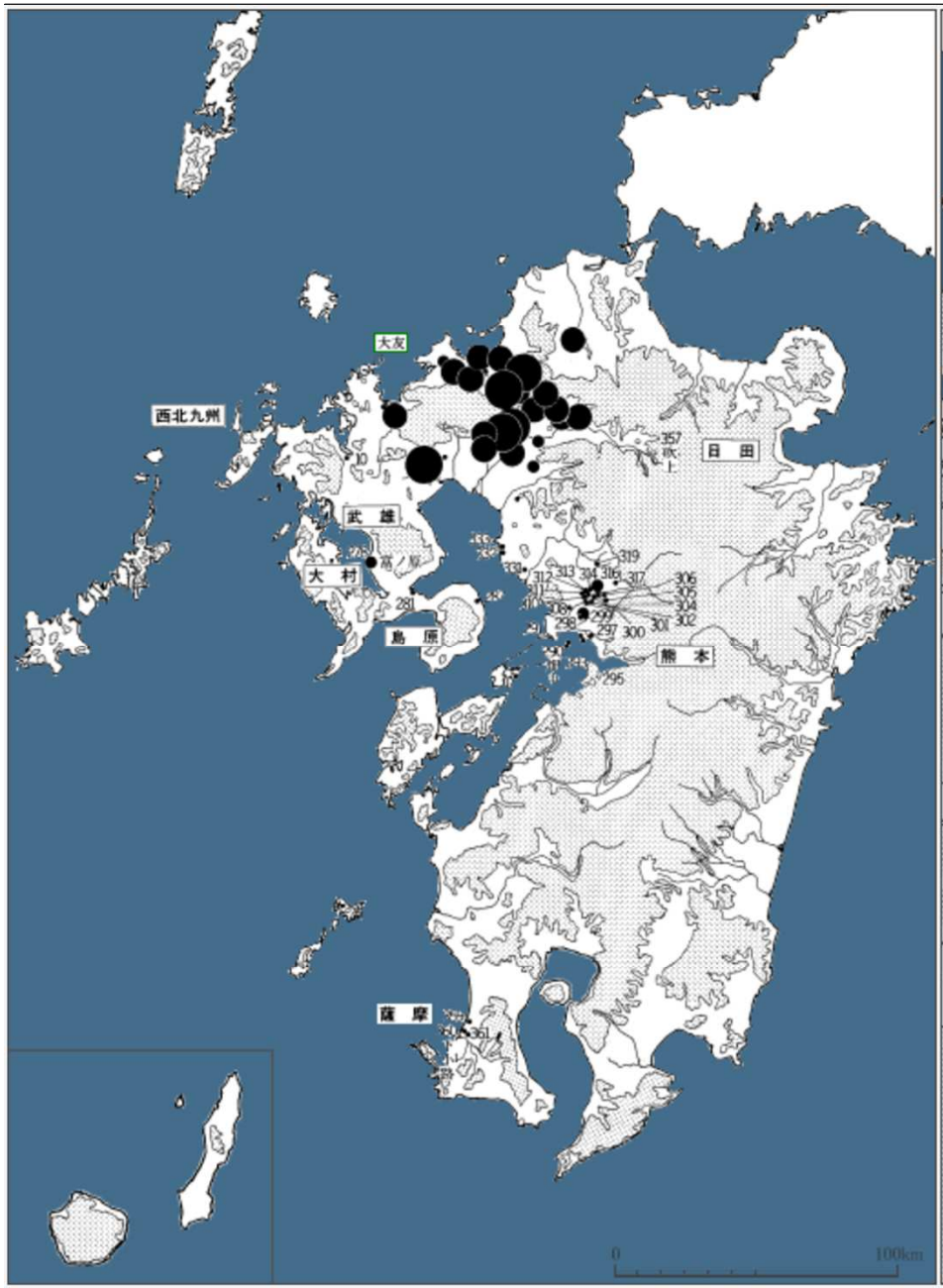
- 中心は背振り山地周辺地域
- 離れた地域の熊本県と五島・鳴子付近に注目。
- 刻目突帯文時代の甕棺としたものは、西北縄文人の子供を埋葬用の土器棺。

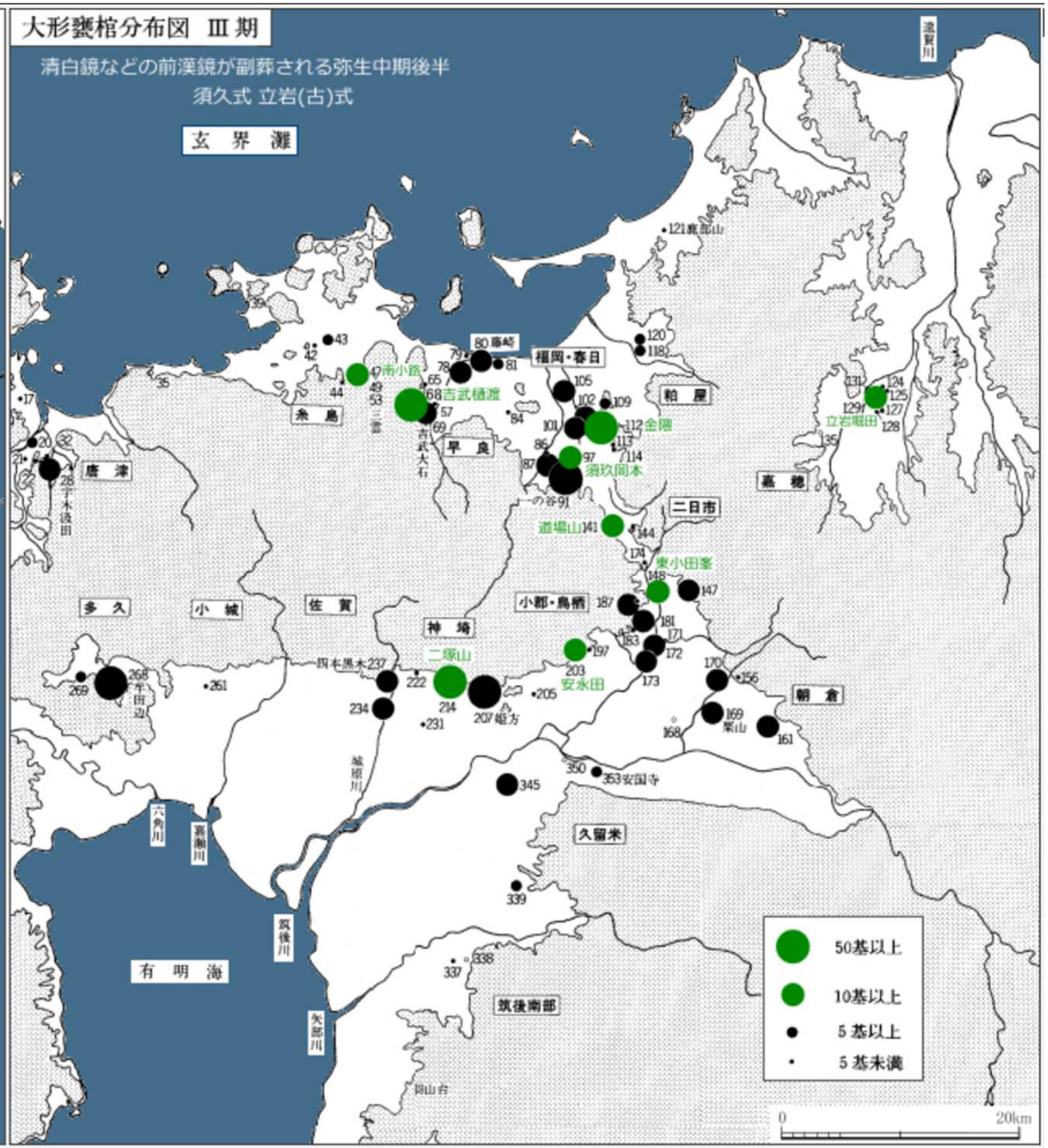
II 期 （金海/城ノ越/汲田）



- 中心は、背振り山地周辺で変わらず。 糸島減少。早良増大。　☆ 弥生前期と中期の境目の時期の城ノ越式土器。
- 離れた地域の熊本県と五島・鳴子付近に甕棺が残る。

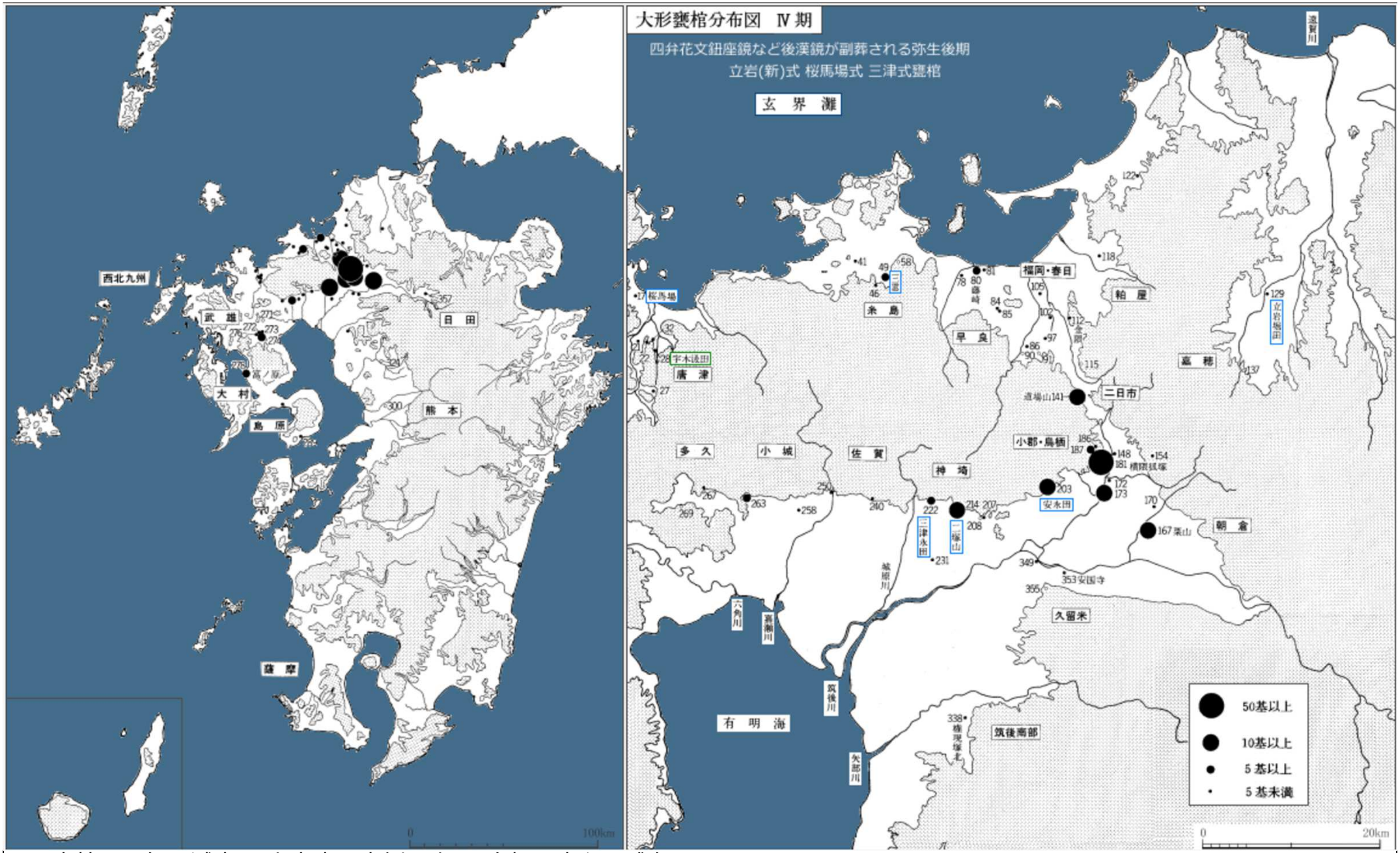
III 期 （須玖/立石(古)）





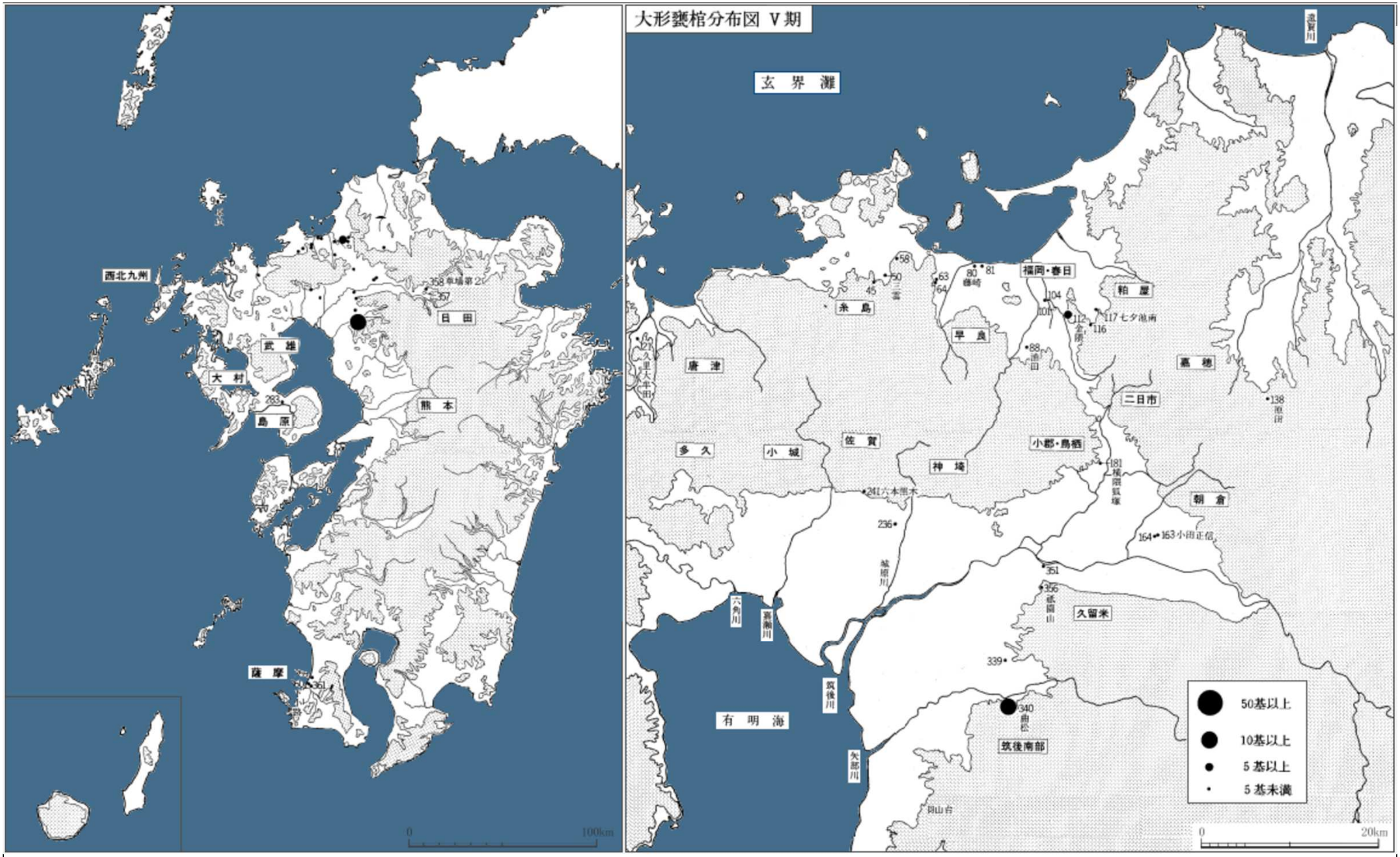
- 遠賀川流域の嘉穂地区（飯塚立岩遺跡）に突然甕棺墓が現れる。
- 熊本県には、相変わらず甕棺が、分散して存在。
- 鏡・剣を副葬した10号甕棺は二日市地域産の甕棺

Ⅳ 期 （立石(新)/桜馬場/ 三津永田）



- 甕棺は一気に減少。 太宰府の南側の小郡・鳥栖を中心に残存。
- 熊本は皆無に。 遠賀川流域もほぼ皆無に。

Ⅴ期（日佐原）



- 祇園山古墳に3基、その南の八女市の曲松遺跡に21基。共に最終期の日佐原式甕棺。
- 曲松古墳群の南には熊本県との県境。 時期によっては熊本・菊池に属した。 その東南3km流には、たたら製鉄・鋳造遺跡あり。

甕棺の分布へのコメント

- 藤尾慎一郎著「九州の甕棺-弥生時代甕棺墓の分布とその変遷-」の記述で注目する記述がある。
  1. Ⅲ期に甕棺墓の規摸, 副葬品の量と質において頂点をきわめた福岡・春日, 神埼, 朝倉では、甕棺墓自体が衰退し, なかでも福岡・春日ではその傾向が強く, (中略)一斉に他の墓制へ転換する。
  2. 嘉穂では立岩遺跡周辺に大形棺が出現する。
     - 立岩遺跡の10号甕棺は二日市地域の道場山型とされ, (中略)大形棺が持ち込まれている。
  3. 熊本における北部九州系大形棺と在地甕棺の関係, (中略)島原や薩摩における熊本系中形棺の存在など検討すべき課題は多い。

- 注目する又は気が付いた点。
  - 甕棺は、三種の神器の剣・鏡・勾玉を副葬する王墓も使用し、その王墓と同地区の墓に甕棺が多く使用されていることから、甕棺は天孫族の墓制と推定する。
  - I期/II期/III期の分布図から、天孫一族は、
    1. 背振山地の南・東・北・北西に居住していたと推定。(神崎・吉野ヶ里・隈・西小田・春日・須玖・
    2. 長崎県の半島/五島列島や熊本県(菊池川流域/白川流域)にも初期から天孫一族が居た。
  - 北部九州の遠賀川流域は、初期のI期/II期には甕棺は出土せず、天孫一族とは別の、「敵対した一族」の居住地と思われる。
  - III期に頂点を極めた後に、福岡・春日＝須玖(岡本など)の地域は、「敵対した一族」に占拠され、墓制も変わったものと考えられる。
  - 遠賀川流域に突然出たIII期の甕棺は、「敵対した一族」の中に、王族が飛び込んできた様相に見える。
    - その甕棺自体は、天孫族の二日市地域から運ばれた。
  - 初期から薩摩に天孫族が居たことと、薩摩の甕棺は熊本から運ばれたこと。
    - III期に熊本に北部九州の大型甕棺運ばれたことに、注目する。
  - 甕棺の終焉期のV期に、祇園山古墳に3基、その南側の曲松古墳に、天孫一族の甕棺が出土することに注目。

天孫族(天孫族)の集落(クニ)の分布(初期状態)

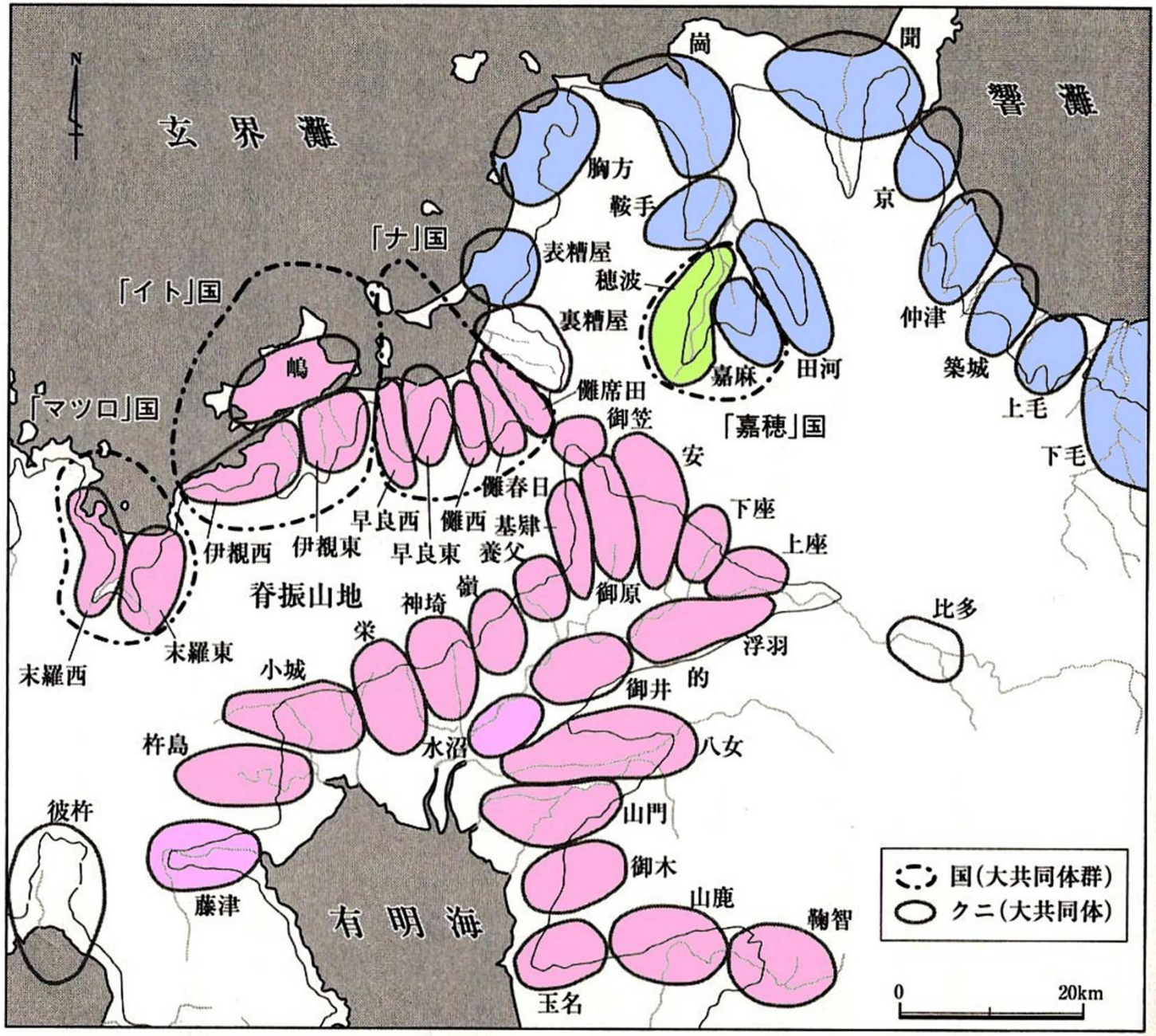


図10　紀元前後の北部九州の部族的国家群（寺沢、2018年より）

- 甕棺の時期別分布図から、天孫族の分布を判断した。
  - 赤系で着色した部分は天孫族
  - 青系で着色した部分は出雲族

高地性集落

寺沢案				
実年代	時代	時期	近畿編年	北九州編年
500	縄文	晩期後半（突帯文土器）	滋賀里Ⅳ式	山ノ寺式（曲り田式）
前5世紀			（口酒井）	
400			船橋式	夜臼式 1 2
前4世紀			長原式	板付Ⅰ式 1 2
300	弥生時代	前期	第Ⅰ様式 1 2 3 4	板付Ⅱ式 1 2 3
前3世紀				
200				
前2世紀		中期	第Ⅱ様式 1 2 3	城ノ越式 1
100			第Ⅲ様式 1 2	須玖式 2 3 4 5
前1世紀			第Ⅳ様式 1 2 3 4	
B. C.				
A. D.				
1世紀		後期	第Ⅴ様式 0 1 2 3	高三潴式 1 2
100				
2世紀			第Ⅵ様式 1 2	下大隅式 3 4
200				
3世紀	古墳	（初頭）前期	庄内式 0 1 2 3	西新式 5
300			布留式 0 1 2 3 4	（土師器）Ⅰa Ⅰb Ⅱa Ⅱb Ⅲa
4世紀				
400			（須恵器）	

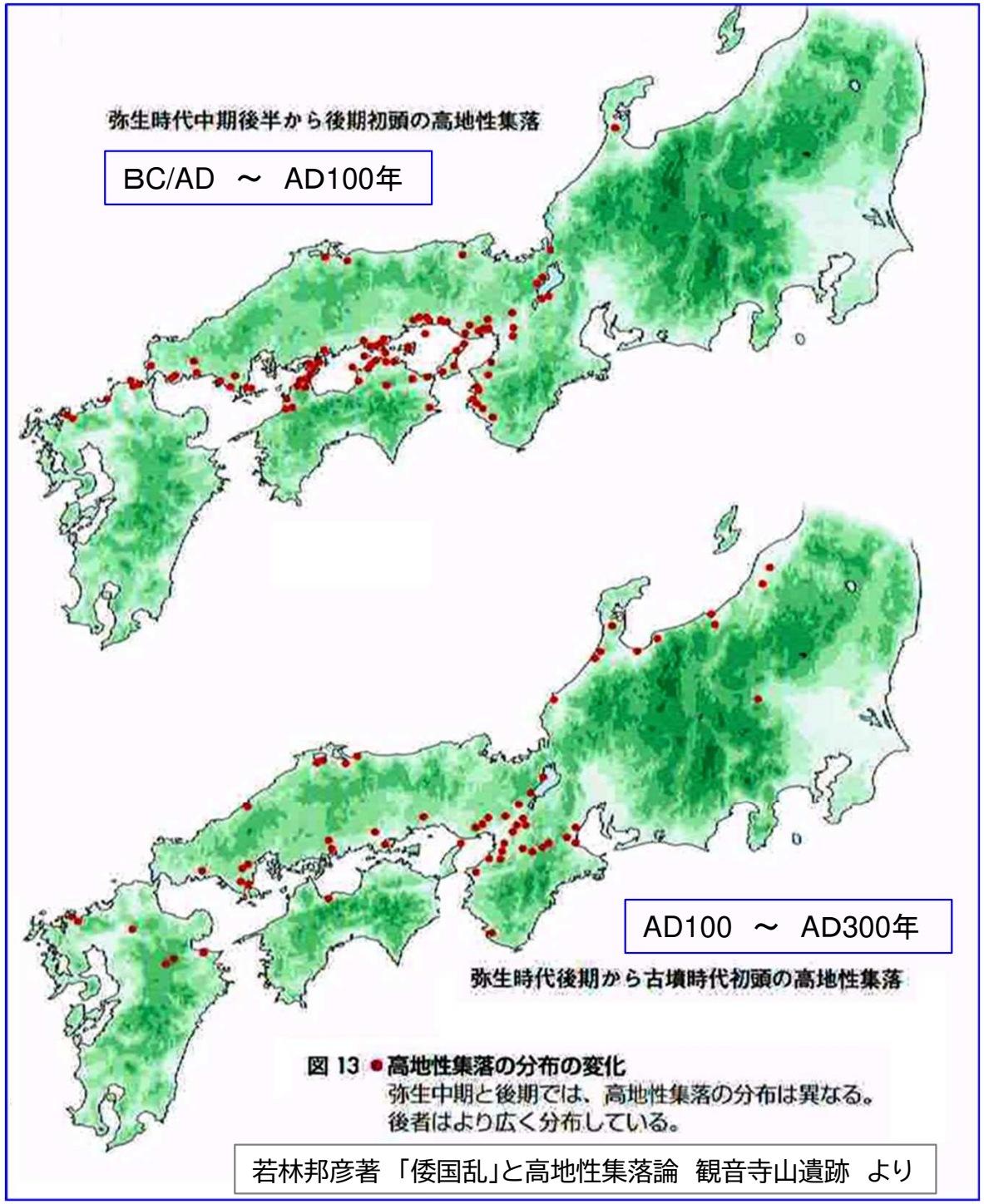
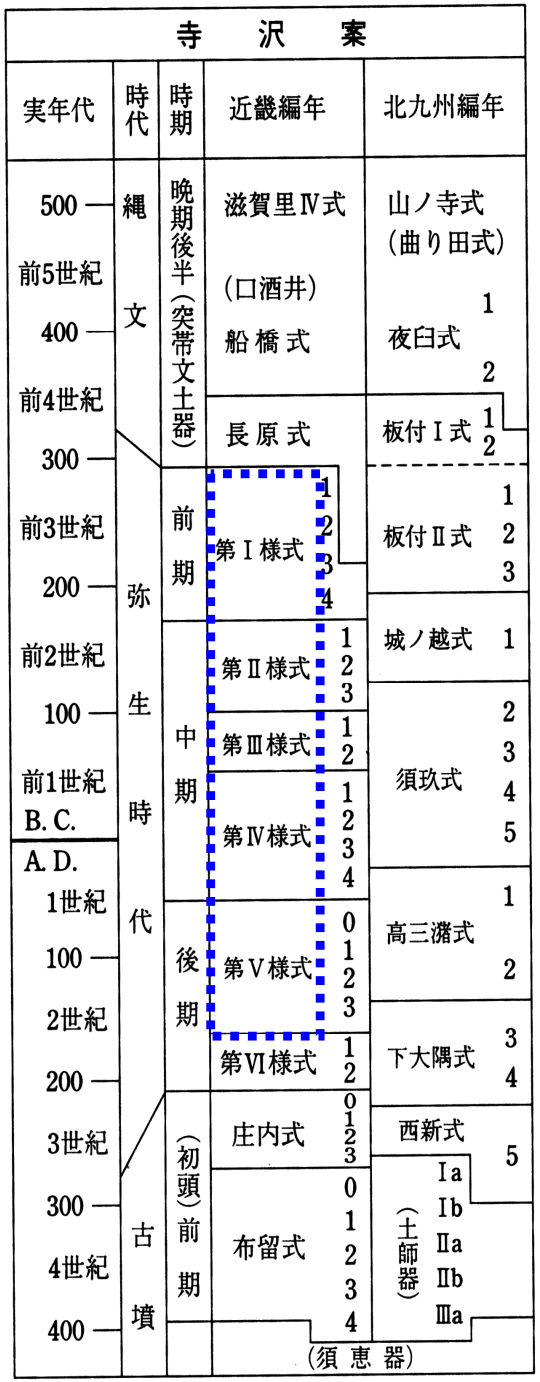


図 13 ●高地性集落の分布の変化
弥生中期と後期では、高地性集落の分布は異なる。
後者はより広く分布している。

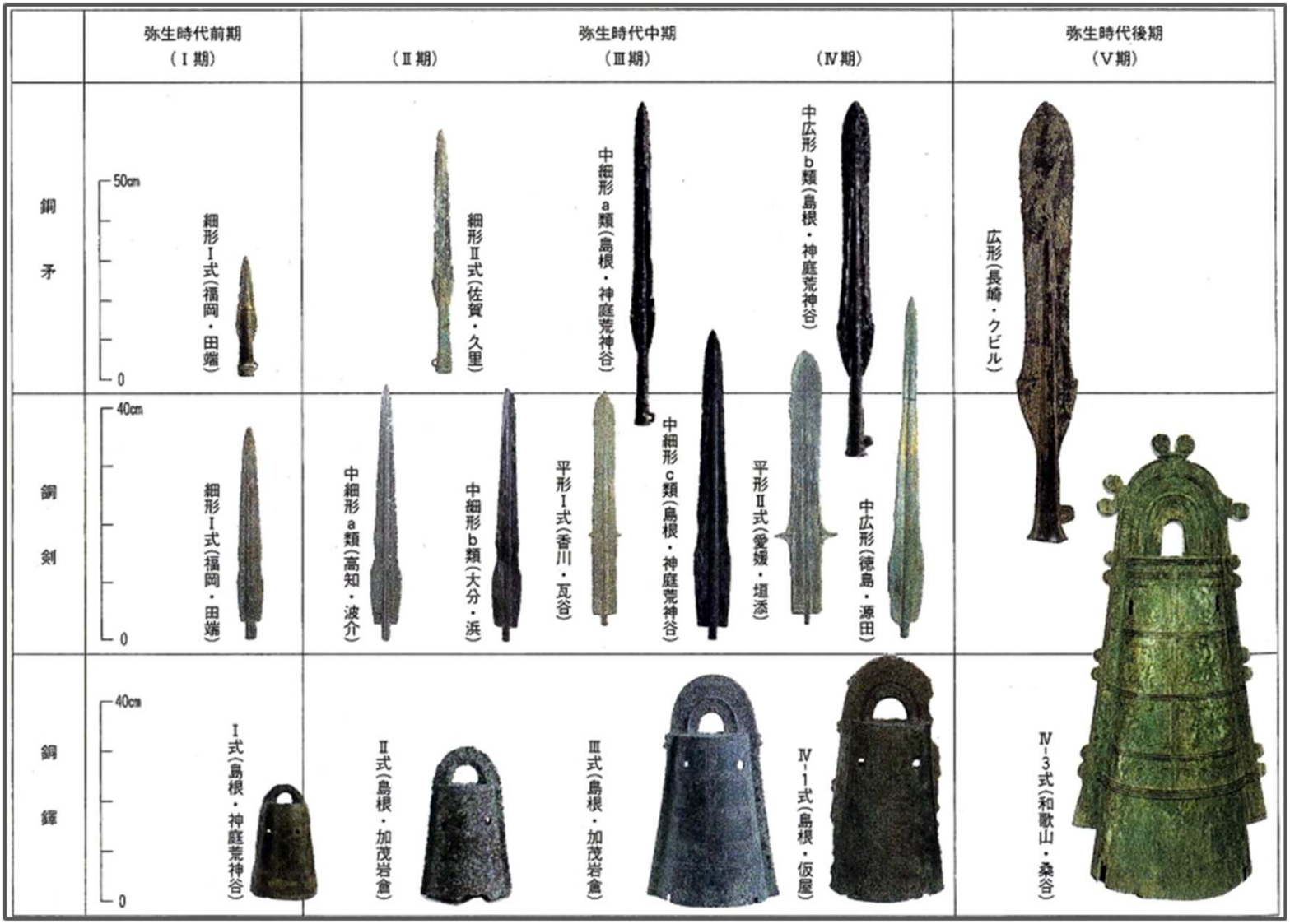
若林邦彦著 「倭国乱」と高地性集落論 観音寺山遺跡 より

高地性集落は北九州の情報が少ない。

青銅祭器



BC300～175	BC175～100	BC100～75	BC75～AD50	AD50　～　150



- 青銅祭器の時代区分は、やや古い方に寄っているように思える。

銅鐸・武器型青銅の生産地域と副葬地域

生産地

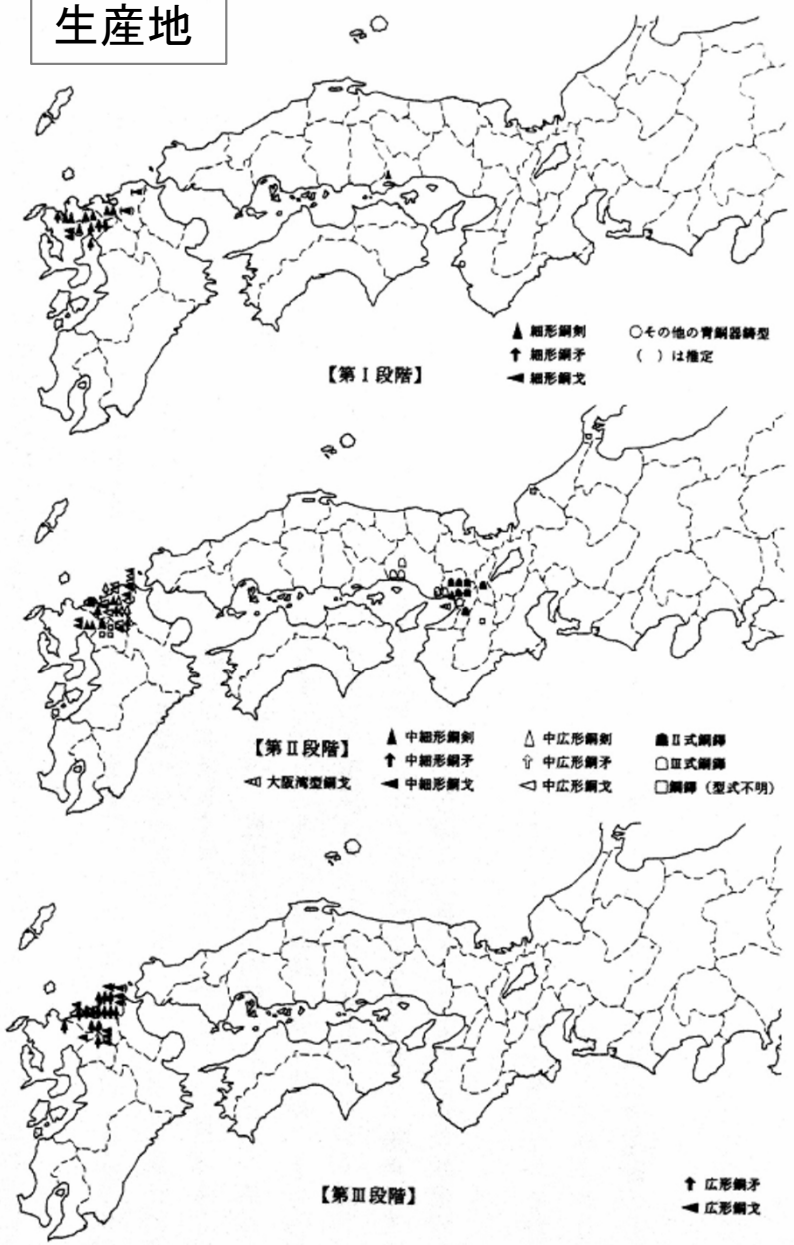


図 12　鋳型の分布
（松本岩雄「弥生青銅器の生産と流通―出雲地域出土青銅器を中心として―」『古代文化』第53巻第4号　2001年より）

- 青銅製品の生産地は北九州に偏在。
- 青銅製品を墓に副葬した地域も九州に偏在。
- 青銅製品の出土の仕方は、
  - 墓に副葬
  - 山野に埋納
- 生産地＝
  鋳型の出土地
- 副葬と生産地域は重なる。
- 第Ⅱ段階に新たに生産が始まった大阪近辺は、副葬が無い。
- 第Ⅲ段階の生産物（広型の青銅器）は副葬されていない。

副葬

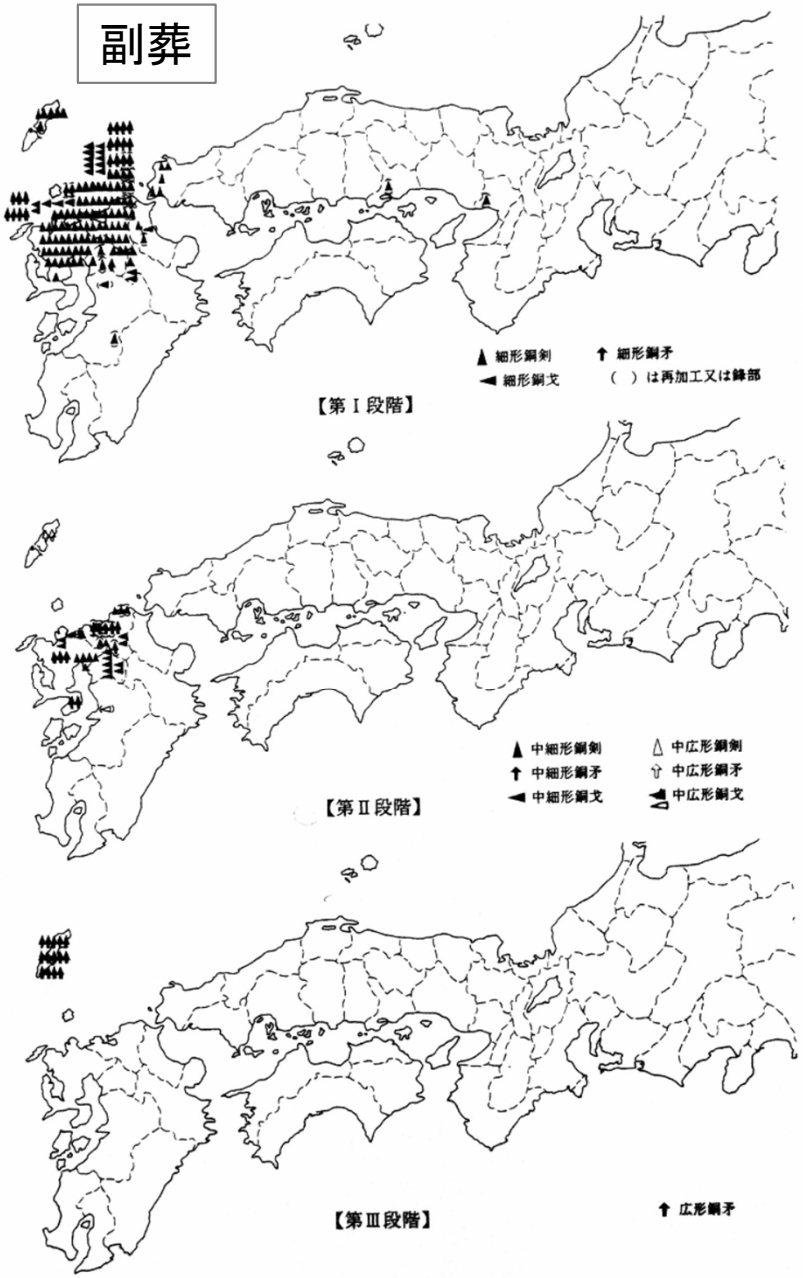


図 7　墳墓出土青銅器の分布
（松本岩雄「弥生青銅器の生産と流通―出雲地域出土青銅器を中心として―」『古代文化』第53巻第4号　2001年より）

銅鐸・武器型青銅器の埋納

- 埋納は広範な地域に広がる。
- 集中する2か所。
  1. 出雲：荒神谷遺跡/加茂岩倉遺跡
  2. 北九州

利用方法は、考古学者は、祭器と云う。

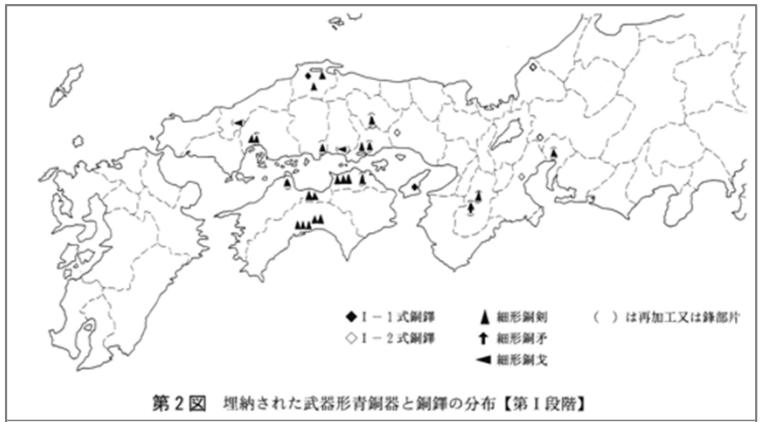
日本書紀に一ヵ所記述がある。

出雲国譲り：大国主命が降伏した時の言。

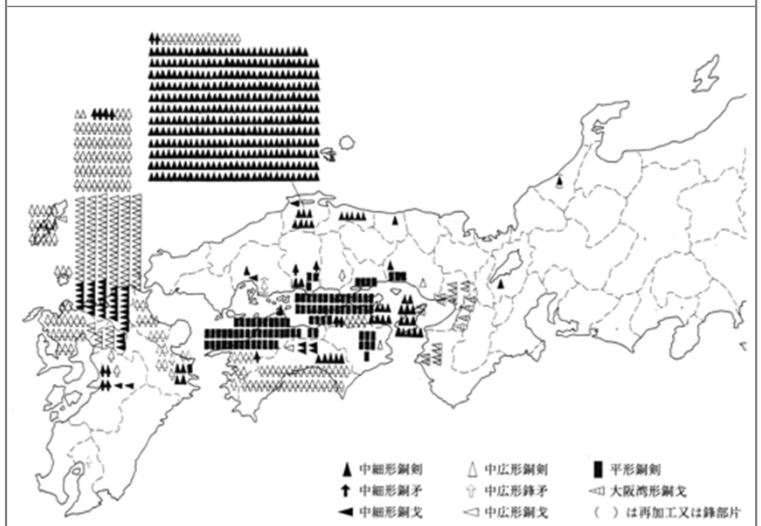
「この矛を使って、国を平らげた。」と矛を天孫族に献上。

- **戦争・支配の道具と理解する。**

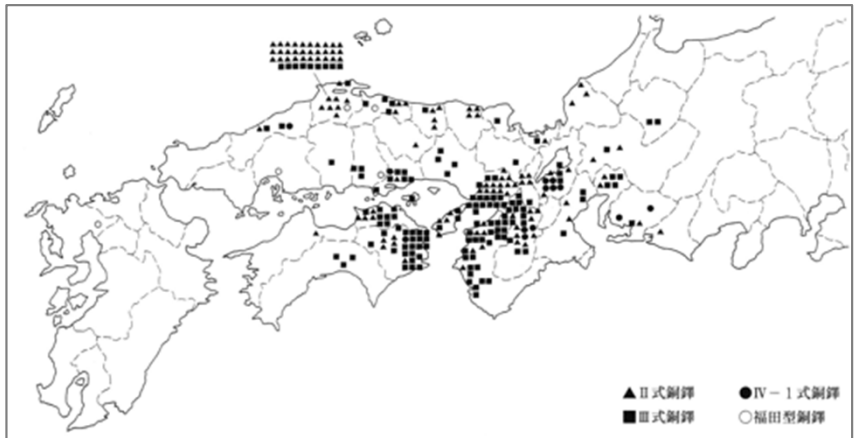
✓ **埋納の意味は別途記す。**



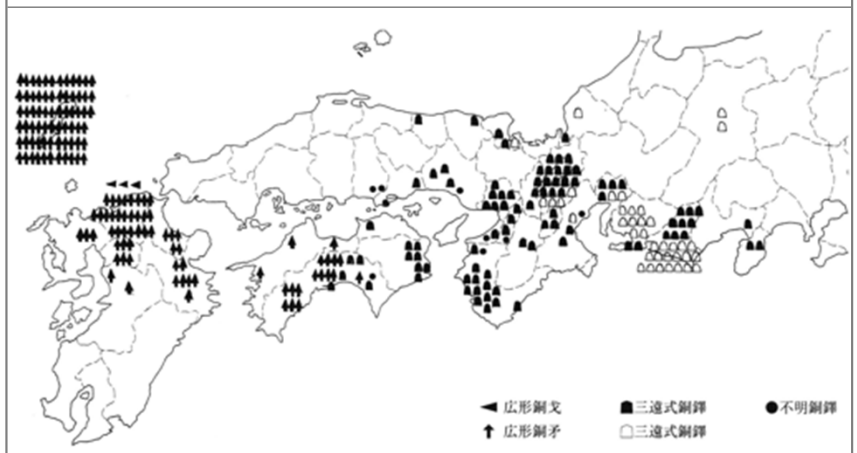
第2図　埋納された武器形青銅器と銅鐸の分布【第Ⅰ段階】



第3図　埋納された武器形青銅器の分布【第Ⅱ段階】



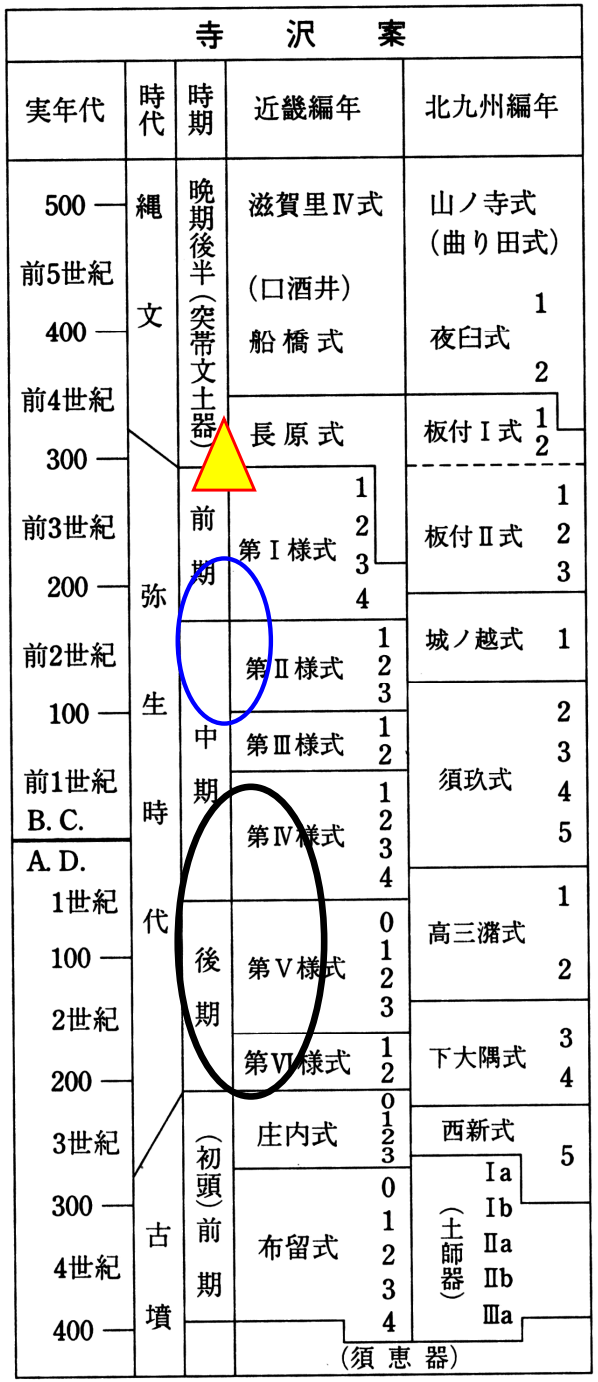
第4図　銅鐸（Ⅱ式～Ⅳ－1式）の分布【第Ⅱ段階】

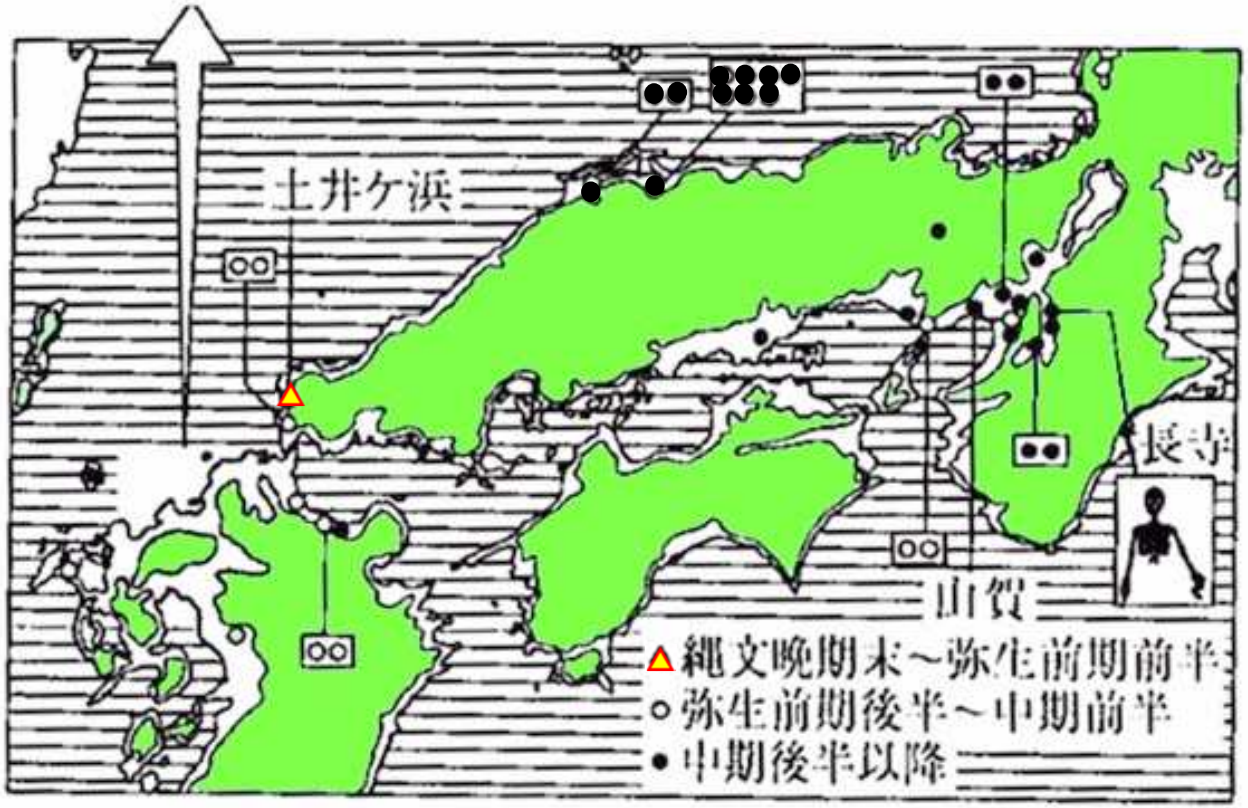


第5図　埋納された武器形青銅器と銅鐸（Ⅳ－2～5）の分布【第Ⅲ段階】

松本岩雄著「弥生青銅器の生産と流通　--出雲地域出土青銅器を中心として–
2001年　古代文化に収録　より

戦争遺跡





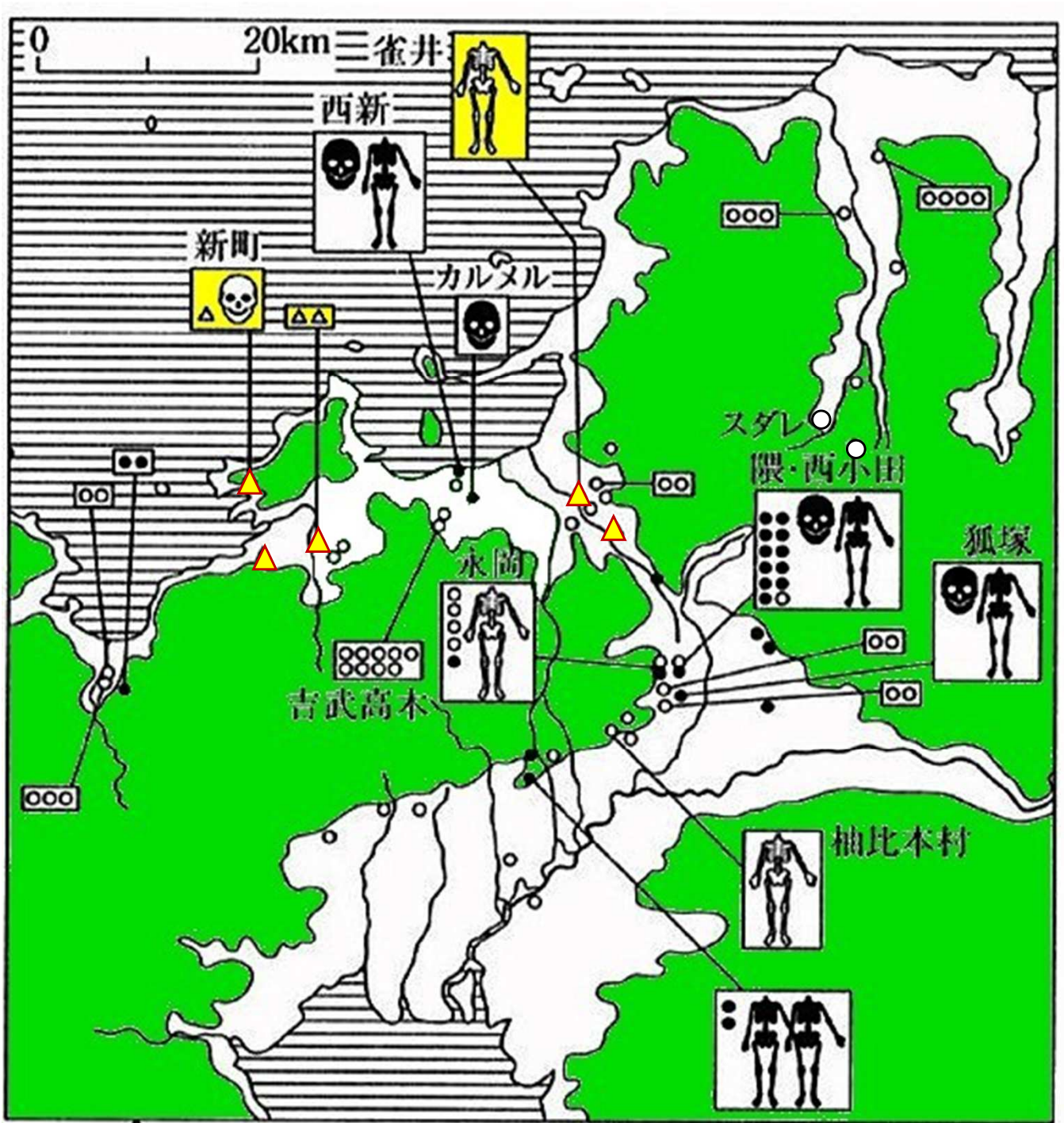
戦争犠牲者の分布 縄文晩期末から弥生中期後半。△、○、●は全身を、絵に示したものはその部分を発掘（『倭国乱る』国立歴史民俗博物館編〔朝日新聞社、1996年〕を参考）

寺澤薫著「王権誕生」より　土井ガ浜と青谷上寺地は丸地が時期を変更

戦争遺跡は、主に北九州と出雲地方・畿内・長野県に分布する。
北九州以外の地域は、北九州の争乱が収まった後の時代のもの

- その受傷人骨は、勝者側のものか？　それとも敗者側のものか？
- 戦場に残された敗者の遺骨は、消滅して残らない。（酸性土壌のため）
- 勝者側は、戦死・負傷した兵士を、故郷に連れ戻す。埋葬され残る。
- **戦傷人骨の遺跡は、勝利者の側のもの**。（特異な条件でのみ敗者側も残る）

戦傷遺跡遺跡（寺沢薫著「王権誕生」の図より、着色・修正）



寺澤薫著「王権誕生」中の戦争犠牲者の分布の北九州の図

△：縄文晩期末～弥生前期前半
○：弥生前期後半～中期前半
●：中期後半以降

△の弥生前期前半については、初回渡来民（西北九州縄文人）と2次弥生渡来民の戦い。

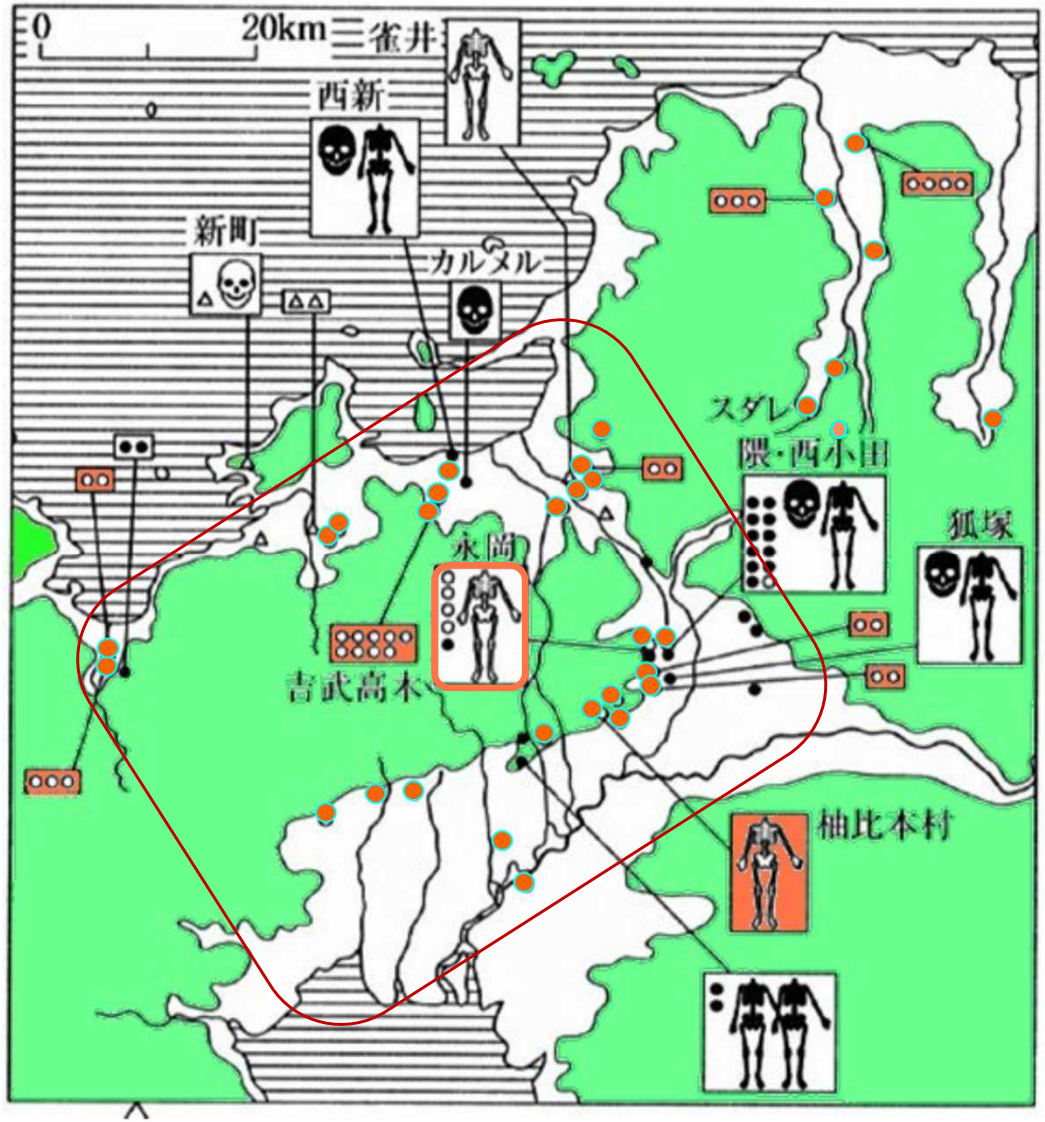
天孫族の神話に関わるのは、
○：弥生前期後半～中期前半
●：中期後半以降

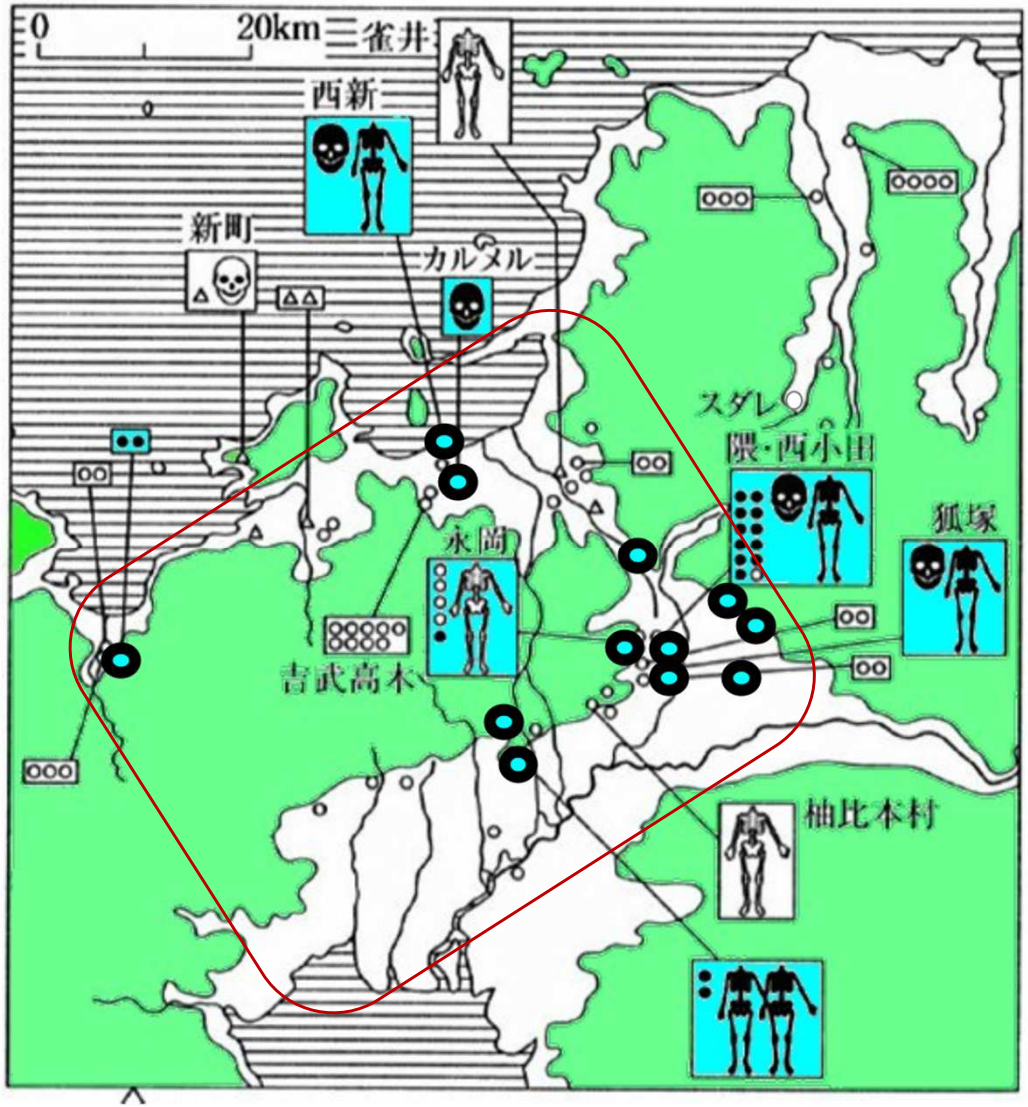
遠賀川流域のスダレは、原図では●とされていたが、原資料を確認し○と修正。

戦争遺跡　時期別色分け地図

●:弥生　前期後半中期前半

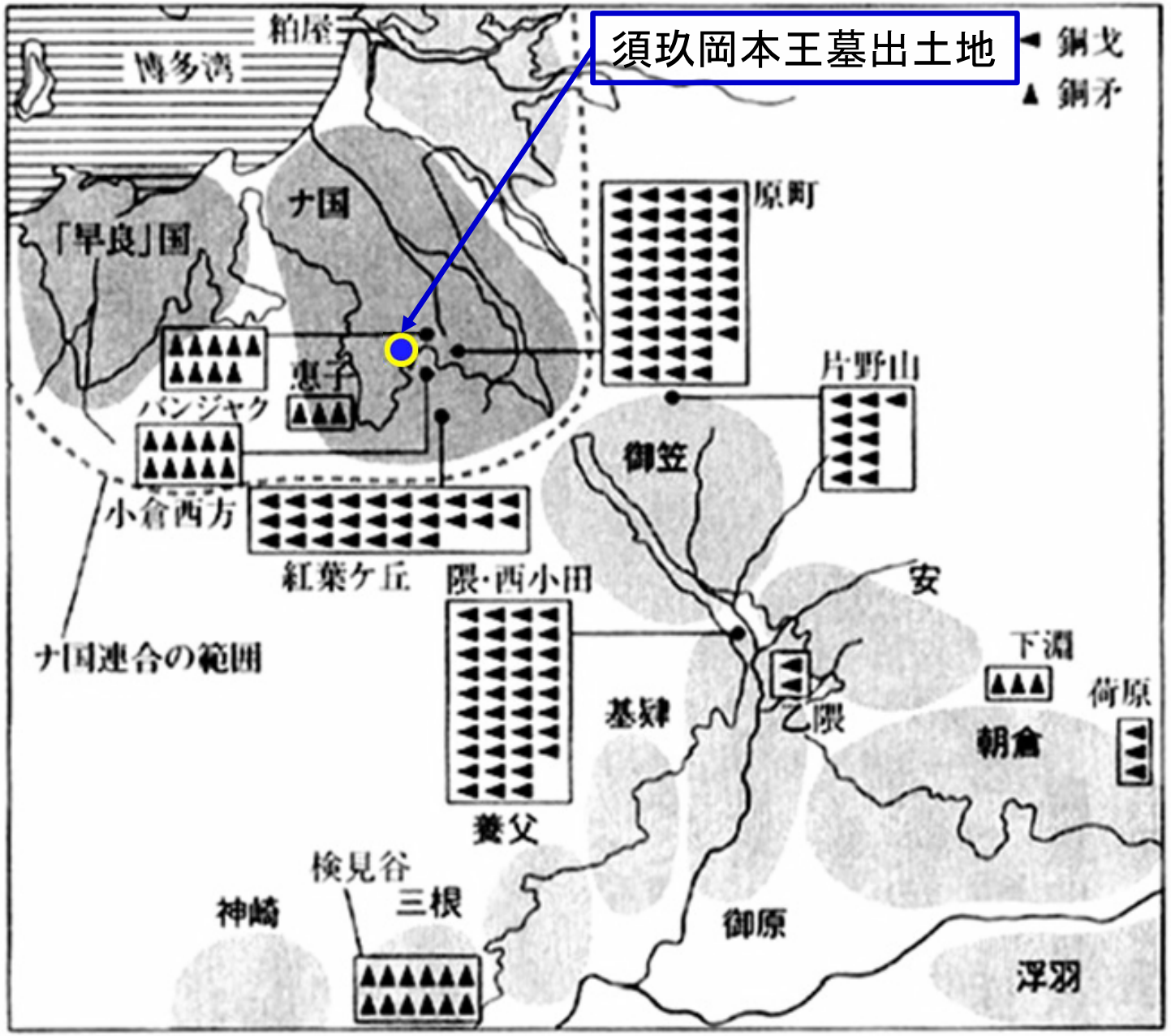
◎　:　中期後半以降





- 赤四角の枠は、天孫族の領域。
- 前期後半から中期前半の時期では、長期間・複数の戦いがあり、双方が勝利した？
- 中期後半以降は天孫族が勝利

須玖岡本の青銅器埋納の跡



ナ国と周辺のクニグニの呪禁

青銅器の埋納は、須玖岡本の丘陵地帯の土手で行われた。

- 須玖岡本は、青銅器の誕生の場所であると同時に、終焉の地でも有った。

埋納の解釈

戦争の勝利者側が、敗者の持っていた武器・祭祀器を、**二度と使えないように人目に付かない処へ埋めたもの。**

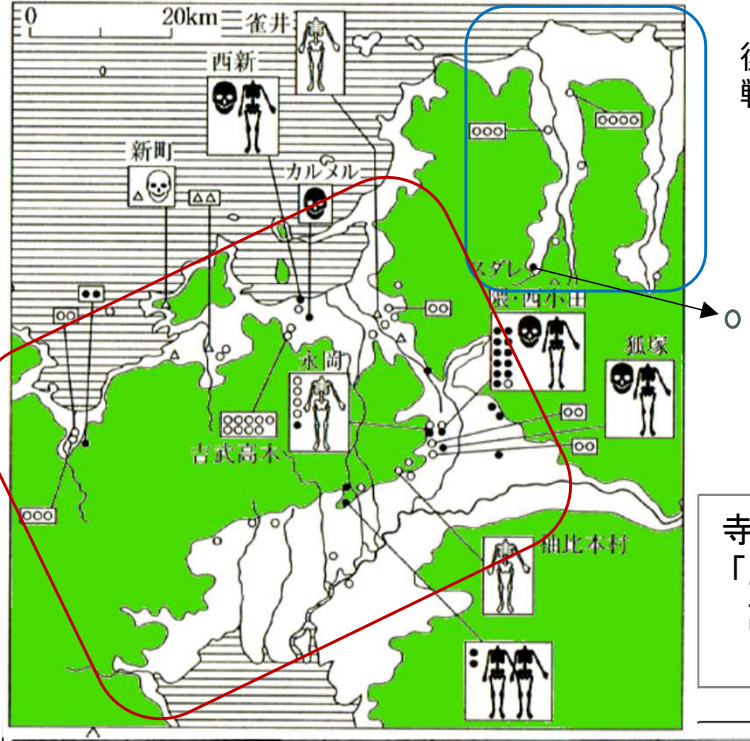
場合によっては、取り上げ、勝利の印としての故郷に持ち帰り、顕示した後に、山中に埋めた。
（左図の片野山/隈・西小田/安/下淵/荷原/検見谷はその例）

又、遠い離れた場所に居る敗者の一族が居る場合、その武器・祭祀器を、敗者の手で、山中に埋めさせた。

北九州の戦況を、再検討する

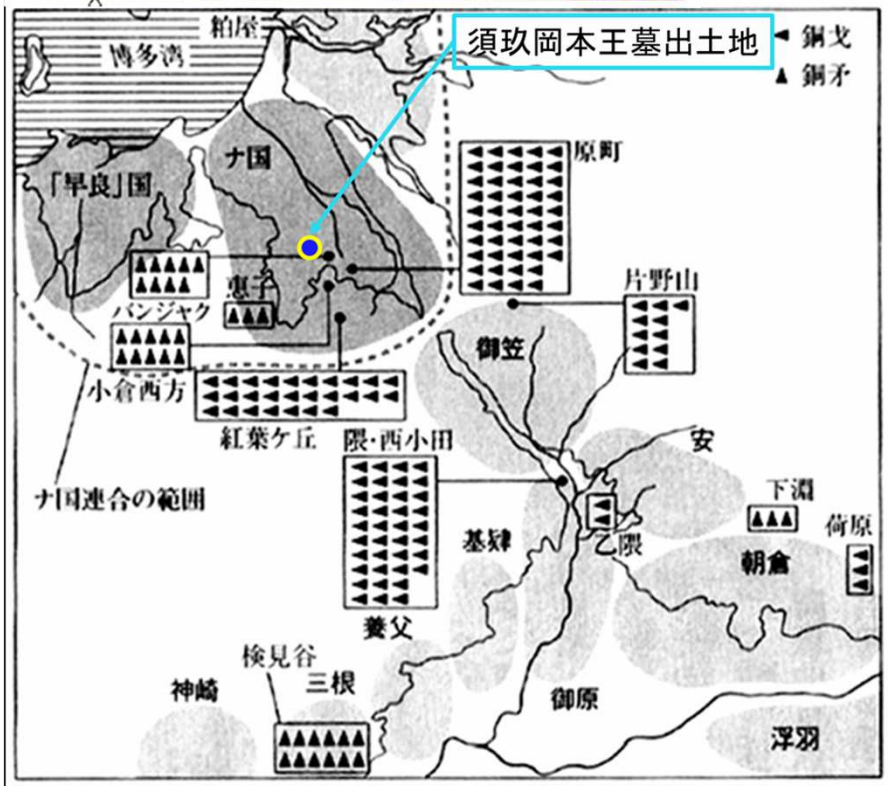
- 弥生前期後半～中期前半
  - 北九州全域に〇が多く、ある時は、出雲族側が勝ち、別の時は、天孫族側が勝ったものと考える。
  - 須玖岡本遺跡の状況から、この地域は天孫族が敗北し、一旦、出雲族側になったと考えられる。
- 弥生中期後半以降
  - 激しい戦いが行われ、天孫族に多くの戦傷者●を出したが勝利した。
    - 遠賀川側は、戦傷者を故郷に戻すことは出来ないほどに、敗退した。
  - この時期が「倭国大乱」にあたる。
  - 勝利した天孫族側は、敗者の旗指物であった青銅製銅戈・銅矛を、天孫族の王墓（須玖岡本遺跡）に集めて戦果を示した上、周辺の山中に埋納した。
  - 更に、隈・西小田・御笠・安・神崎の各地に、勝利した軍隊が戻る時には、打ち負かした敵の旗指物を戦果として持ち帰り、故郷に勝利の報告を行ない、埋納した。

- 北九州での倭国大乱とその最終大決戦に勝利した天孫族は、東方にある出雲族の拠点をそのままにしておくことは、禍根を残すことになるため、全面降伏させるため軍隊を出した。
  - それが、建御雷神の命が軍船で出かけた、「出雲の国譲り」の話となる。



後期の
戦争遺跡

寺沢薫著
「王権の
誕生」
より



ナ国と周辺のクニグニの呪禁

神話の解釈と考古資料を対比し、統合した歴史理解 ①

- 弥生時代の開始時期には、先住民の西北九州縄文人と弥生渡来人（倭人）が戦い、弥生渡来人が勝利した。
- 弥生渡来人は水田稲作をベースに北九州から日本全土に拡散し、居住。
  - 板付式土器を使用
- 甕棺の分布から：天孫族は背振り山地の周辺に居住。
    - 天孫族は、当初より、熊本県と鹿児島にも拠点を築いていた。
  - その東方：遠賀川流域とその東の地域には、別グループ（出雲族）が居た。
- 天孫族の王族は、早良平野に居住し、三種の神器と副葬する墓を築いた。
  - 遠賀川流域の出雲族との勢力争いが発生。
  - 一時的に出雲族が早良平野を占拠。 出雲族の城ノ越式土器使用
    - 福岡平野の比恵・那珂遺跡を都市計画に沿って、大溝を作る。
  - その後、天孫族が勝利。　須玖式土器使用
- その後、福岡平野の南の丘陵地帯に鉄・青銅・ガラスなどの工業地帯を築き、春日・須玖を王域に。
  - 須玖岡本に三種に神器を副葬する王墓。 天照大神か。
  - 天忍穂耳命が王位を継承
- 西暦57年：倭の奴国王（天忍穂耳命）が後漢に朝献　金印受領
  - 出雲族が攻勢をかけ、天孫族の王域を脅かす。
  - 長男の天火明命を遠賀川流域に送った。政略結婚・人質？
    - 遠賀川流域の飯塚立岩遺跡の大型甕棺墓に埋葬
  - 次男の邇邇芸命に王権を譲り（三種の神器を渡し）、多くの重臣や主な武将を添えて、新天地へ移動させた。
  - 天忍穂耳命本人と王域の春日・須玖は出雲の手に。（王墓無し）
    - 鉄・青銅・ガラスの工業地帯は、都市計画に沿って再編成。

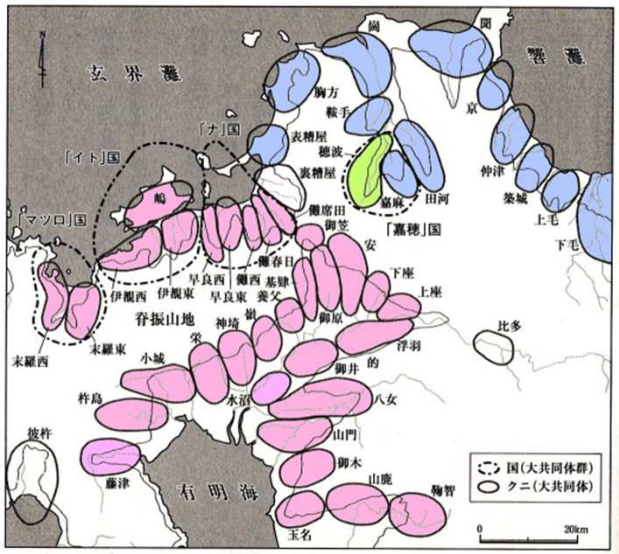
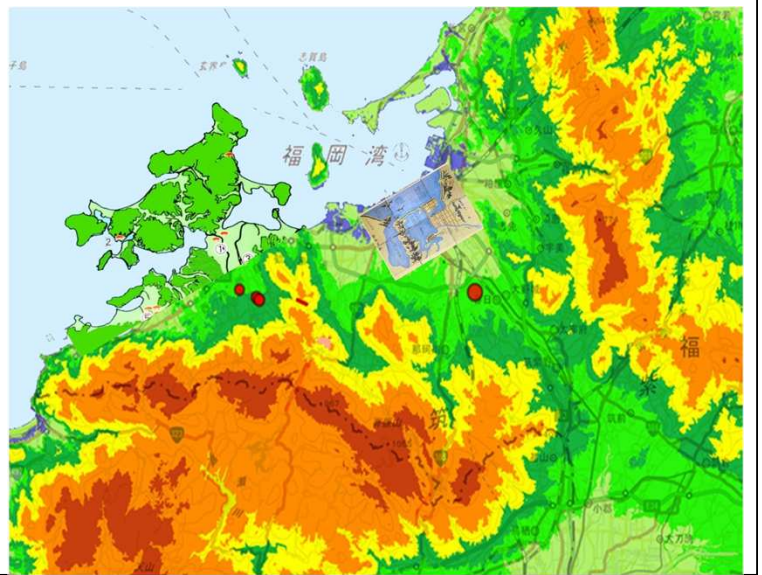


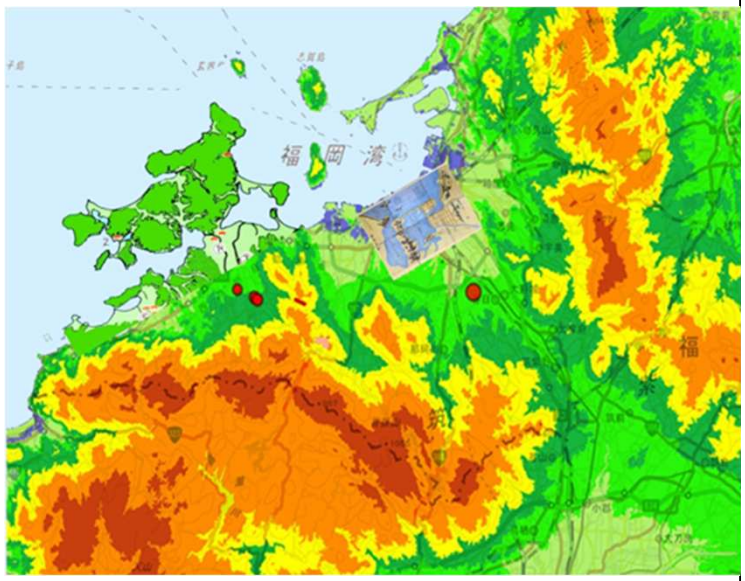
図10　紀元前後の北部九州の部族的国家群（寺沢、2018年より）



神話の解釈と考古資料を対比し、統合した歴史理解 ②

- 邇邇芸命一行は、在地の國津神の有志に導かれ、日向峠を越え、前原・糸島地区へ。
  - 弥生時代には、糸島は狭い(細い)陸地で前原地区と繋がっていた。
  - その接続地域の海浜の一つの岬が「吾田の長屋の笠狭碕」
  - 前原・糸島地区は、弥生最古の曲り田遺跡がある水田耕作の可能な地域だが、その後、福岡/早良の発展に取り残された地域。耕作可能な土地があり、水産物が獲れ、豊かな土地。
  - 糸島と前原の間に波静かな湾が有り、鉄鉱石・鉄在が入手可能な朝鮮半島南部地域との航路が開設できることを確認。
  - 壱岐・対馬・朝鮮半島との航路を確保し、交易を実施。

  (「朝鮮半島出土弥生系土器から復元する日韓交渉」 石丸あゆみ著)
    - 須玖式土器を韓半島へ持ち込み、鉄製品を輸入
  - 同伴した工業技術者が活躍し、鉄製品・青銅製品・ガラスの生産が一気に急上昇。 鉄製武器を増産し、出雲族との戦いに備えた。



- 西暦107年:倭国王・師升後漢に朝献 生口160人献上
  - 三雲南小路遺跡の王墓は邇邇芸命の王墓と推定
    - 前原・糸島地区の最初の王墓で、その後、300年間、葬祭の儀式が継続した。(残存土器から推定。)
- 邇邇芸命から次の王位継承時に兄弟の騒動が発生。(海幸彦・山幸彦の伝説)
  - 弟の山幸彦:火遠理命が海人族(志賀の島の安曇族)の協力を得て、王位を継承。
  - 兄の海幸彦=火照命が服従を誓い、遠く離れた熊本・菊池地区へ移動。(北九州製の大型甕棺墓に埋葬)
  - 火遠理命の時代には、出雲族との戦いの準備のため、鉄製武器の備蓄と反撃体制の準備を行ったものと推定。

神話の解釈と考古資料を対比し、統合した歴史理解 ③

- 火遠理命は、井原鑓溝王墓に埋葬されたと推測。
  - 鵜草葺不合命が王位継承。
  - その当時の天孫族・出雲族の勢力範囲は右図と推定。
  - 飯塚立岩から嘉麻市から南側の秋月・甘木の山越えのルートが有り、その南端に大己貴神社が存在。
    - その南の下座・上座から筑後川の南側の地域には、味耜高彦根神を祀る神社が多い。連弩用の三角翼鏃の出土が多い。
    - 従って、その地域は出雲方に占領された地域と判断。
- 記紀には、その後大きな戦いの記述は無いが、考古資料では数多く存在。

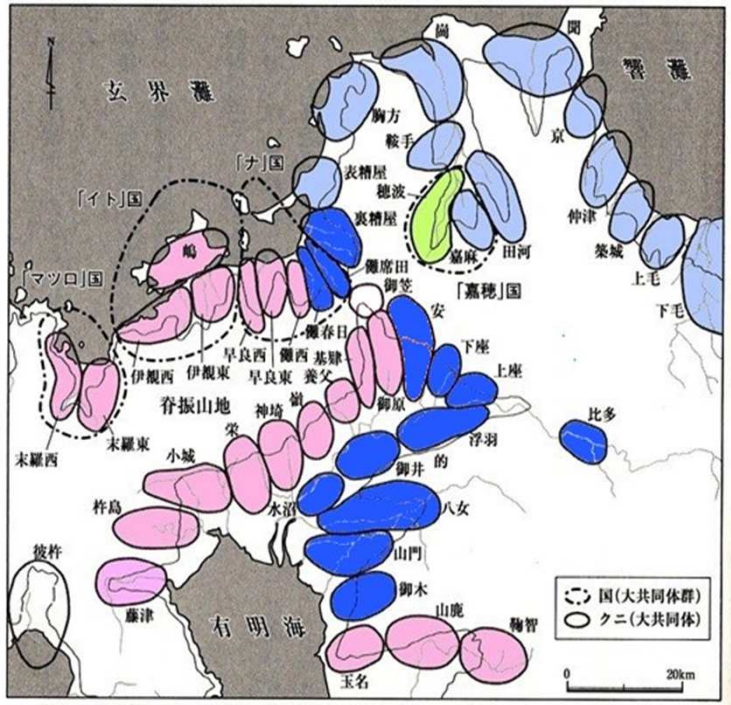


図10 紀元前後の北部九州の部族的国家群（寺沢、2018年より）

青は、出雲方の占領地。

- 弥生中期後半以降の北九州の大戦争が勃発。
  - 戦争遺跡では、早良・隈・西小田・安・神崎などの天孫族の地域に戦傷遺体が多く、大量の犠牲者を出しながら、天孫族が勝利。
  - 最大の戦場は、過去の王域の春日・須玖岡本周辺と見る。
  - 須玖岡本の王墓/工業地帯には、広形銅矛等の武器型青銅器が大量に埋納。
    - 天孫族側が出雲方の戦争時の旗指物に該当する武器型青銅器を埋納したもの。
    - 戦いに勝った隈・西小田・神崎の天孫族は、武器型青銅器を地元に持ち帰り、勝利したことを故郷に示し、その後、埋納したものと理解する。
  - この天孫族と出雲族の大戦争は、暦年に渡り、双方に多大な犠牲を出し、最終的には天孫族が勝った。
    - 出雲側の大将は、味耜高彦根神と推定。 この地域に多くの神社を残すが、後世に名を残す神社無し。
    - 天孫族側の大将は、鵜草葺不合命と推定。平原遺跡の王墓に埋葬。
  - この大戦争が、魏志倭人伝に記される倭国大乱。
  - この大戦争に勝利した天孫族は、北九州だけの勝利とせず、出雲族が支配する日本全土を支配すべく、出雲の国譲りの戦争に乗り出す。

神話の解釈と考古資料を対比し、統合した歴史理解 ④

- 天孫族は、出雲国譲りに成功し、出雲族は降参し、領地を差し出したが、出雲支配地の収納には、支障が発生した。
  - 建御雷神・経津主神は、出雲側の久那斗神を道案内に、東端の鹿島香取まで領地の収納を行った。
  - その収納した地域を、出雲側に居た天孫族の饒速日（天火明）が勝手に自分の手に収納した。

- 鵜草葺不合命の王位継承者は、五瀬。
  - 五瀬は、3人の弟（神武を含む）を帯同し、拡大した支配地を統治するために適した地へ向かった。
    - 前原・糸島地区から新しい王域（首都）の大和へ向けて出発。
    - これを神武東征と云い、勝手に領地を収納した饒速日との戦争となり、五瀬や二人の兄が死亡し。
    - 辛うじて、神武が東征に成功した。

  - 出雲国譲り・神武東征は、部分的な記述に留めた。

古事記・日本書紀が、北九州の大戦争：倭国大乱を記載しなかった理由

- 国の歴史書・正史で有るならば、記載すべきだったと考える。

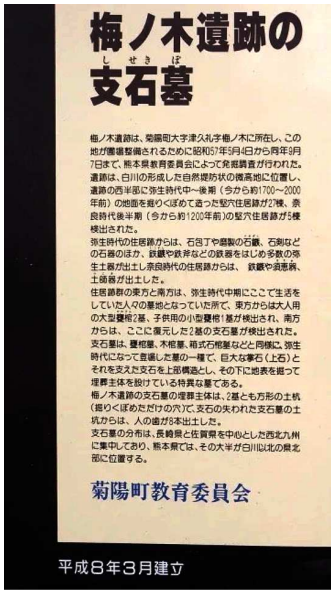
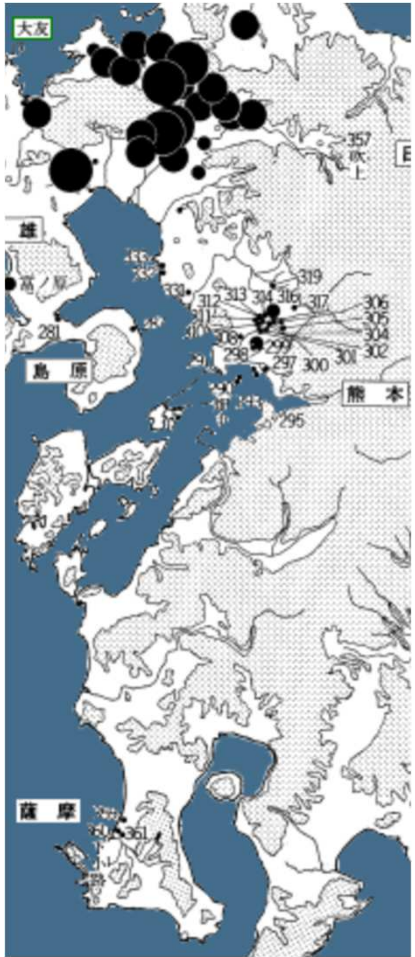
- 古事記の場合、余りにも悲惨な事実は書かないと云う例が有る。
  - 神武東征に出た神武の二人の兄については、誕生の時点で、海に入ってあの世にに行ったとのみ紹介し、神武東征の最大の惨事である熊野灘での遭難で死亡したことも記さ無い。
    - 神武東征軍が熊野灘の遭難でほぼ全滅した悲惨な事故を一切記載していない。
  - 日本書紀では熊野灘の遭難事故は、簡単に記載し、二人の兄：稲飯命と三毛入野命が嵐で死んだとし、神武等は船を進めたと記し、あまりにも悲惨な遭難事故は、目が向かない程度に記載。

- 古事記は、
  - 北九州の大戦争：倭国大乱を、余りにも悲惨な大戦争で、大量に身内の天孫族が死んだ事件を、全く記載しなかったものと、推測する。
  - 従って、出雲族に王域を取られ、追い詰められた天孫降臨の状態から、途中経過の記載が無く、突然、出雲族を追い詰める国譲りの話に飛び、歴史的には辻褄の合わない記述になってしまった、と推定する。

- 日本書紀は、
  - 先に完成し流布した古事記に、北九州の大戦争：倭国大乱が書かれなかったため、触れたくない悲惨な事実を記載して、天皇の不興を買うような冒険はしなかったと推定。

神話の解釈と考古資料を対比・統合した年表

- 紀元前3世紀： 弥生渡来人（倭人）が日本に到来。　稲作を始めた先住の西北縄文人と戦い勝つ。
- 水田稲作・金属器をベースとした高度文明を持った倭人が北九州を中心に、日本全土へ拡散。
- その倭人集団の首長となる天孫族は、北九州の早良/春日・須玖/神崎・吉野ヶ里等に居住。
    - 同じ倭人で対立する出雲族は、遠賀川流域から東に居住。
- 紀元前1世紀： 早良平野に天孫族の王墓が出現。 天孫族と出雲族の争いが発生。
    - 出雲族が天孫族の王域などを、一時的に占領。（城ノ越土器が一時的に普及。）
- 紀元1世紀： 須玖岡本に鉄・青銅等の工業地帯ができ、そこが王域となる。
    - 須玖岡本の王墓：天照大神
    - 天忍穂耳命が王位を継承
- 西暦57年：倭人の奴国王（天忍穂耳命）が中国漢に朝献し、金印を受領。
        - 出雲族の攻勢が強まり、
        - 次男の邇邇芸命に王権を譲り（三種の神器を渡し）、王域を見限り、新天地へ送り出す。→天孫降臨
    - 須玖岡本の天孫族王域は、出雲族が占拠。 天忍穂耳命の消息は消える。（金印が志賀の島へ）
    - 邇邇芸命は、前原・糸島地区で、新天地開拓を行い、韓国の鉄を入手し、武器や工業を興伸
- 西暦107年：邇邇芸命は中国漢に朝献
    - 三雲南小路遺跡の王墓に埋葬
    - 火遠理命が王位継承　（兄の火照命が服従を誓い、遠く離れた熊本・菊池地区へ移動）
    - 井原鑓溝王墓に埋葬
    - 鵜草葺不合命が王位を継承
- 西暦220年頃：北九州の大戦争（倭国大乱）が発生。天孫族と出雲族の決戦が行われた。
    - 天孫族が勝利し、その勢いを駆って、出雲国譲りの戦いを実行し、勝利。
    - 平原古墳・王墓に鵜草葺不合命が埋葬される。
    - 全国支配達成のため、神武東征のため、前原・糸島地区から大和に向かって、進攻。
- 西暦238年：九州残存部隊の王の卑弥呼が魏に朝献。

神話と考古資料を対比し、統合した歴史理解　追記　火照命-隼人族

- 火照命(海幸彦)と隼人について
  - 火照命は、山幸彦(火遠理命)との争いに敗れ、服従を誓った。古事記にも隼人の祖先と記載されている。
  - 火照命は、服従を誓った後に、前原・糸島の地を離れ、熊本・鹿児島/大隅半島に拠点を移したと推定する。
    - 熊本・大隅半島は、隼人が居住する地であり、倭人移住当初(甕棺I期)より、甕棺が出土し、天孫族の支配地域であった。熊本県菊池郡大津町の無田原遺跡に16基の大型甕棺
    - 甕棺III期には急に大型甕棺の埋葬が行われた。
      - 熊本県菊池郡菊陽地区の梅の木遺跡に大型甕棺7基、外多数の甕棺
      - その甕棺は北九州から運ばれたもので、この時期に北九州から天孫族の高貴な人物が移動してきた結果と推定できる。
    - 従って、火照命＝隼人族の祖先は、前原・糸島地区から、離れた場所で、天孫族所縁の熊本県菊池郡に移動し、その後も子孫が居住したものと見られる。
    - この地域一帯では、多数の弥生遺跡が存在し、広形の銅戈などが複数の遺跡で出土する。
      - 更に弥生時代後期の鉄製品の出土が多いことが特徴的。
    - この地域の北20kmには方保田東原遺跡(山鹿市方保田)が有る。
      - 青銅製鏡・巴形銅器や多数の鉄製品が出土。
- 卑弥呼の時代に敵対した狗奴国は、熊本県菊池郡と推定する。
  - 火照命の子孫の隼人族が、何らかの事情で、北九州の卑弥呼と敵対。
  - 多くの鉄製武器を所有していたことから、邪馬台国にとって手ごわい相手だったと推定する。